

研究紀要

第14号

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

第 14 号

1 9 9 8

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

[論文]

菱形文の成立と変形、そしてその諸相……………谷井 彪（1）

木曽良遺跡の研究（1）……………村田 健二（25）

　－弥生時代の環濠集落を中心にして－
　　剣持 和夫
　　書上 元博
　　石坂 俊郎
　　福田 聖
　　佐藤 康二

集落出土のヘラ記号からみる須恵器の生産と流通……末木 啓介（89）

　－武藏国の場合－

こくしのたち
国司館の基礎的研究……………田中 広明（119）

木曾良遺跡の研究（1）

—弥生時代の環濠集落を中心に—

村田 健二・劔持 和夫・書上 元博
石坂 俊郎・福田 聖・佐藤 康二

要約 現在、環濠集落の研究は、全国規模の集成が何度か試みられ、漸く地域毎の出現・消滅についての比較検討がなされるようになった。更に、高地性集落との関連についても論議されるまでに深化した。しかし、ややもすると早急な政治的解釈の側に傾倒し、遺構の性格を固定化して考える風調も少なくない。ここでは、関東地方における環濠集落の様相を研究するにあたり、与野市中里前原遺跡でみられるような、環濠集落出現以前（直前）の集落、環濠を有する集落、そして環濠を廃棄した集落といった一連の集落の推移に対して、どのような解釈が可能かを原点に、これまで未整理であった岩槻市木曾良遺跡をも含め検討しようとするものである。さて、今回報告する木曾良遺跡においては、昭和48年、埼玉県遺跡調査会により調査された環濠集落であるが、埼玉県史、岩槻市史に一部掲載され周知化されているとはいえ、遺跡の全容を知るまでには至っていない。今回、報告書の体裁をあえて選択したのは、環濠集落の在り方をより性格にトレースすることと、出土した遺物（土器）の中に他地域の影響化で成立したものが多数混入していたことを重視した結果で、限られた情報から正確に復元する必要に迫られたことによる。以下、報告書の構成を遵守して記載し、今後の課題解決に向け問題点を整理することで今回の任を全うしようと思う。最後に、まとめとして、埼玉県内の環濠集落を網羅し、外来系土器についてコメントを加えた。

1. 発掘調査に至る経過

石油危機に見舞われようとする昭和48年春、県教育局文化財保護室に東急不動産から岩槻市木曾良を宅地開発するにあたり、埋蔵文化財の所在を確認するための照会があった。

早速、文化財保護室では東急不動産の担当者立ち会いのもと、現地踏査を実施した。明治27年に発見された「木曾良貝塚」は南側にあり、造成対象地は隣接した北方に突き出す台地上に位置している。貝塚に隣接する造成地内の北側には縄文土器や貝殻の散布が見られたが、南側では土器などの遺物は採集できなかつたが、遺構の存在が予想され、木曾良遺跡とした。

現地踏査の所見に基づき、発掘調査の必要性を認識。東急不動産と協議に入り、記録保存の措置を講ずることとした。工事工程・調査計画・調査期間などを協議のうえ、埼玉県遺跡調査会が委託を受け、発掘調査を実施することになった。

遺跡調査会と委託契約締結後、同調査会から文化財保護法57条1項の規定による発掘届けが、昭和48年7月28日付け、埼遺調第36号で提出された。届けに対し、文化庁より昭和48年8月27日付け、委保第5の1525号の発掘許可通知があった。

発掘届けは、発掘部分の面積13,000m²（遺跡規模約20,000m²）、遺跡の種類は縄文時代集落跡、貝塚と記載し、勇躍8月13日発掘調査に入ったが、調査が進むにつれて、予期しない成果をもたらすことになった。（昼間考次）

2. 遺跡の立地と環境

歴史的環境 木曾良遺跡周辺には、縄文時代の標識遺跡として著名的な黒浜貝塚、稻荷台遺跡をはじめ、旧石器時代から近世の岩槻城まで数多くの遺跡が存在し、古くからの人々の営みが知られている。ここでは、木曾良遺跡の環濠集落に関する弥生時代の遺跡について概観する。

弥生時代中期の遺跡は、大和田片柳・鳩ヶ谷・岩槻・慈恩寺各支台の元荒川、綾瀬川、芝川、見沼低地に臨む台地の縁辺部に位置する。岩槻市諏訪山、馬込、平林寺、西原、掛、大宮市深作東部遺跡群Bブロック、南中丸、浦和市谷ノ前、上野田西の各遺跡が知られている。

中期中葉の遺跡は、慈恩寺支台の先端付近、元荒川に臨む小舌状台地の縁辺に位置する諏訪山遺跡、南遺跡が知られるのみである。諏訪山遺跡（増田ほか1971）では溝から所謂須和田式の土器が出土し、この溝を四隅切れの周溝墓の一部とする見解もある。南遺跡（城近・宮崎ほか1971）では土坑墓が1基調査されている。

中期後半の遺跡は、中葉に比して飛躍的に増加する。各支台に認められるが、特に見沼低地、綾瀬川の谷に臨む台地縁辺部に多く見られる。

大和田片柳支台では、芝川低地に向かって大きく侵食された海老沼の谷に面する東側台地縁辺部に御蔵台遺跡（埼玉県教育委員会1981）、南中野遺跡（安岡1979）がある。未報告で詳細は不明だが住居跡と土坑が検出され、南中野遺跡の土坑は再葬墓とされている。

鳩ヶ谷支台では、見沼低地に臨む台地縁辺の南北を小支谷によって画された小舌状台地とでもいえる位置に上野田西台遺跡がある。（青木・小倉・大塚1987、青木・大塚・柳田1988、青木・高山・大塚1988）現在までに4次に渡る調査で、中期後半の住居跡16軒が検出されている。また、第3次調査で検出された中期後半の第3号土坑は土坑墓の可能性が指摘されている。鳩ヶ谷支台周辺の中心的な集落の一つと考えられる。綾瀬川に臨む小支台上には、谷ノ前遺跡がある。（青木・中村・大塚・柳田1989）中期後半の住居跡1軒、土坑3基が調査されている。支台でもやや北側の、綾瀬川が南流する大支谷に臨む縁辺部には深作東部遺跡群（山形・諸墨1984）がある。Bブロックで、2軒の住居跡が調査されている。

岩槻支台には、深作東部遺跡群のほぼ対岸、元荒川と綾瀬川に挟まれた幅400mほどの部分に馬込遺跡（庄野・増田1972）、平林寺遺跡（塩野1972）がある。両遺跡は200mほどの至近に位置し、基本的には同一の遺跡と考えられる。馬込遺跡からは住居跡3軒、土坑1基、平林寺遺跡からは住居跡1軒、土坑1基が検出されている。1.5kmほど南の綾瀬川を臨む台地縁辺部には住居跡6軒が調査された西原遺跡（佐藤1972）がある。

馬込・平林寺遺跡の2km東の元荒川に向かって突出した舌状台地の北側には掛貝塚がある。（岩槻市1983）住居跡1軒が調査されている。

中期後半の遺跡は、集落跡が多く知られるが周溝墓等の墓域については、わずかに南中野遺跡の再葬墓、上野田西台遺跡の土坑が知られるのみで明らかでない。集落とは立地が異なっていた可能性もあるだろう。

後期の遺跡は、中期後半の遺跡同様に見沼低地、綾瀬川の谷に臨む台地縁辺部に多く見られる。三崎台、染谷遺跡群、深作東部遺跡群、上野田西台、上野田膝子、中野田中原、笹久保新田、西原、

木曾良の各遺跡が知られている。

大和田片柳支台では、上野田西台遺跡のほぼ対岸の見沼低地に突出した小舌状台地上に三崎台遺跡（笹森・小川・田代1996）がある。住居跡18軒が調査され、40号住居跡からは銅鏡が出土している。その北側約1.5kmの台地縁辺部には染谷遺跡群（山口・諸墨ほか1986）がある。後期から弥生時代終末・古墳時代前期初頭の住居跡18軒が調査されている。小支谷を挟んで南側に隣接するA—239号遺跡（山口・渡辺1989）では、後期から弥生時代終末・古墳時代前期初頭の住居跡5軒が調査されている。三崎台、染谷遺跡群周辺が大和田片柳支台の中心的な集落域であることが分かる。

鳩ヶ谷支台では、上野田西台遺跡で弥生時代後期から終末の住居跡21軒が調査されている。谷を隔てて北側に位置する上野田膝子遺跡（青木・高山・大塚1988）では住居跡1軒が調査されている。上野田西台・上野田膝子の両遺跡周辺が鳩ヶ谷支台における中心的な集落と考えられる。綾瀬川の谷に面する小支谷の縁辺部にある中野田中町遺跡（青木1968）からは、土採りによって住居跡が発見されている。また、谷ノ前遺跡では住居跡1軒が調査されている。上流の深作東部遺跡群では、Aブロックで住居跡4軒、Bブロックで7軒、Cブロックで2軒の住居跡が調査されている。Bブロックでは環濠が検出されている。

岩槻支台には木曾良遺跡同様の後期から弥生時代終末・古墳時代初頭の10軒の住居跡が調査された西原遺跡がある。

綾瀬川左岸の自然堤防上に位置する笹久保新田遺跡（岩槻市1983）からは、水田耕作中に底部穿孔壺が出土し、方形周溝墓等の墓域の存在が推定されている。

後期の遺跡は、三崎台、染谷、深作東部、上野田西台、西原、木曾良といったいくつかのまとまりがある。中期後半同様、墓域の様相は明らかでない。また、図示はしていないが大和田片柳支台の芝川を挟んだ対岸に当たる大宮台地縁辺部では、環濠集落として知られる馬場北をはじめ、北宿、北宿西、松木北、馬場小室山、大古里等の後期の大規模な集落が知られている。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺跡はかなりの数に上る。各支台に遺跡が見られるが、特に岩槻支台を北上した蓮田支台に急激な遺跡の増加が見られる。立地自体は後期とほぼ同様で台地縁辺部に位置するものが多い。

大和田片柳支台では、鎌倉公園、篠山、三崎台、染谷、後の各遺跡が知られている。支台の南側、海老沼の東岸には鎌倉公園遺跡（山形・諸墨1984）がある。住居跡23軒が調査され、パレス文様施文の小型高壙が出土している。芝川低地に臨む台地縁辺には篠山遺跡（笹森1988）がある。方形周溝墓4基が調査され、2号方形周溝墓からは舟が線刻された壺と石製の垂飾が出土している。三崎台遺跡では住居跡7軒が調査され、52号住居跡からは小型彷製鏡が出土している。三崎台遺跡の小支谷を挟んだ南側には同時期のA—3、A—5遺跡があり、三崎台遺跡周辺が大和田片柳支台の中心的集落の一つであると考えられる。染谷遺跡群については前述のとおりで、後期から継続する集落である。更に谷を溯った台地縁辺部には後遺跡（安岡1962）がある。住居跡3軒が調査されている。

鳩ヶ谷支台では、後期から継続する上野田西台に加えて、膝子八幡神社、中里、宮ヶ谷塔、深作稻荷、深作東部遺跡群、丸ヶ崎の各遺跡が知られ、急増している。上野田西台を除き、全て綾瀬川に東面する。膝子八幡神社遺跡（山口・黒須1982）は谷に臨む急崖上に位置する。住居跡4軒が調

査されている。1kmほど北側の綾瀬川方向に突出した小舌状台地上に位置する中里遺跡(宮崎1988)で住居跡2軒が調査されている。宮ヶ谷塔遺跡群(田代・笠森・黒坂1985)は深作東部遺跡群と中里遺跡の中間に位置する。弥生時代終末から古墳時代前期初頭の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡5軒が調査されている。深作稻荷台遺跡(笠森・澤柳1994)は深作東部遺跡群の南側に近接している。住居跡5軒が調査されている。深作東部遺跡群ではB区で4軒の住居跡が調査されている。深作東部遺跡群と小支谷を隔てて北西に位置する丸ヶ崎遺跡群(澤柳・笠森1995)で8軒の住居跡が調査されている。また図示していないが更に2kmほど溯ると66軒の住居跡が調査された尾山台遺跡(上尾市教育委員会1996)がある。

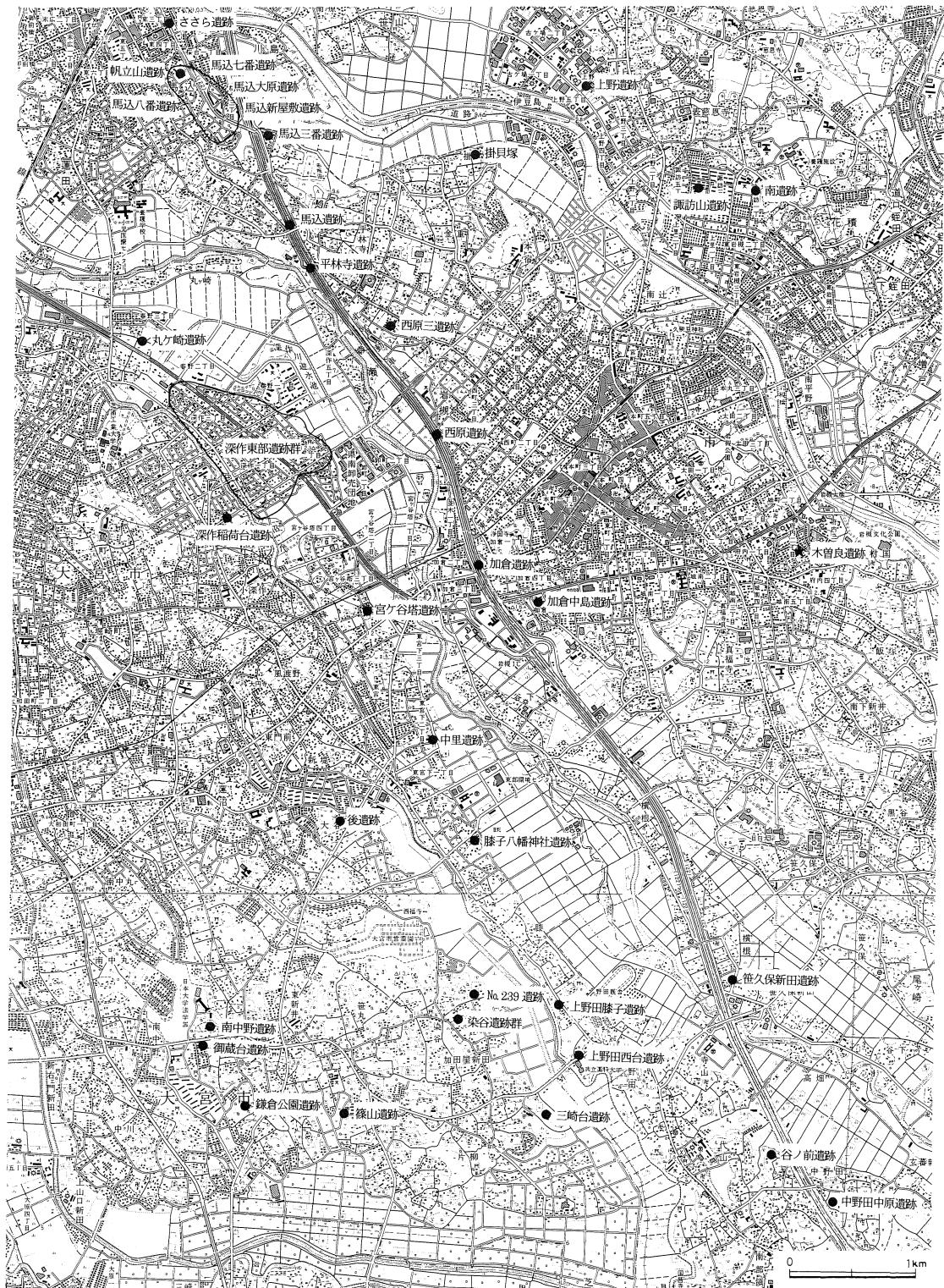
岩槻支台でも後期から継続する西原遺跡に加えて台地縁辺部に新たな遺跡が見られる。綾瀬川流域の宮ヶ谷塔遺跡群の対岸には、加倉遺跡、加倉中島遺跡がある。綾瀬川へ向かって南北に延びる舌状台地の先端の加倉中島遺跡(小林1995)では住居跡1軒が調査されている。やや北側の綾瀬川に面した縁辺部には加倉遺跡(小熊・佐藤1972)がある。住居跡5軒が調査されている。西原遺跡については前述した。約1km北側の縁辺部には西原三遺跡(小林・青木1993)があり、住居跡1軒が調査されている。馬込遺跡では住居跡6軒、平林寺遺跡では住居跡14軒が調査されている。平林寺遺跡からは、パレス文様施文の瓢壺、タタキ甕、近江系の受口状口縁の甕が出土している。

岩槻支台の南側にある七島遺跡(岩槻市1983)は元荒川の谷に面した小孤立丘上に位置する。土採り工事の際に住居跡2軒が発見されている。

蓮田支台では、この時期に急激な遺跡の増加が見られる。特に馬込遺跡と元荒川へ向かって開く小支谷を挟んだ支台南側の縁辺部では数多くの集落が調査され、遺跡群として捉えられる。各々の遺跡の間には小支谷が入り、視覚的には元荒川に向かって突出した小舌状台地上に集落が並ぶ景観を呈している。馬込三番遺跡(小林・青木・関根1995)では古墳時代前期の3軒の住居跡が調査されている。小支谷を挟んだ西側には馬込七番、馬込大原、馬込新屋敷遺跡がある。馬込七番遺跡(野中1982)では10軒の、馬込大原遺跡(藤原1983)では6軒の、馬込新屋敷遺跡(藤原1983)では14軒の住居跡が調査されている。馬込新屋敷遺跡では吉ヶ谷式の高壙が出土している。この3遺跡の北側の小支谷の奥に馬込八番遺跡(寺内1995)がある。住居跡8軒と土坑1基が調査され、手焙形土器、吉ヶ谷式の壺が出土している。その西側に隣接して帆立山遺跡(大塚・田中・小宮1992)があり、住居跡1軒が調査されている。小支谷の北側にはささら遺跡(藤原1983、大塚・寺内1986、寺内1994)がある。25軒の住居跡が調査され、手焙形土器が出土している。また、図示していないがささら遺跡の北側に近接する久台遺跡からは方形周溝墓3基が調査され、吉ヶ谷式の壺が出土している。

慈恩寺支台には、元荒川を臨む台地縁辺部に古墳時代前期の諏訪山遺跡、上野遺跡がある。諏訪山遺跡では23軒の住居跡が調査されている。その北側約1kmの小舌状台地上には住居跡13軒が調査された上野遺跡(小林1980、金子・小林1986)がある。

弥生時代中期から弥生時代終末・古墳時代前期に至る木曾良遺跡周辺の調査例を概観してきたが、集落の立地としては低地に臨む左右を小支谷により隔てられた小舌状台地上が好まれる傾向があるようである。また、現段階では集落の調査例が多く、墓域の調査はわずかである。弥生時代中期以



第1図 周辺の遺跡

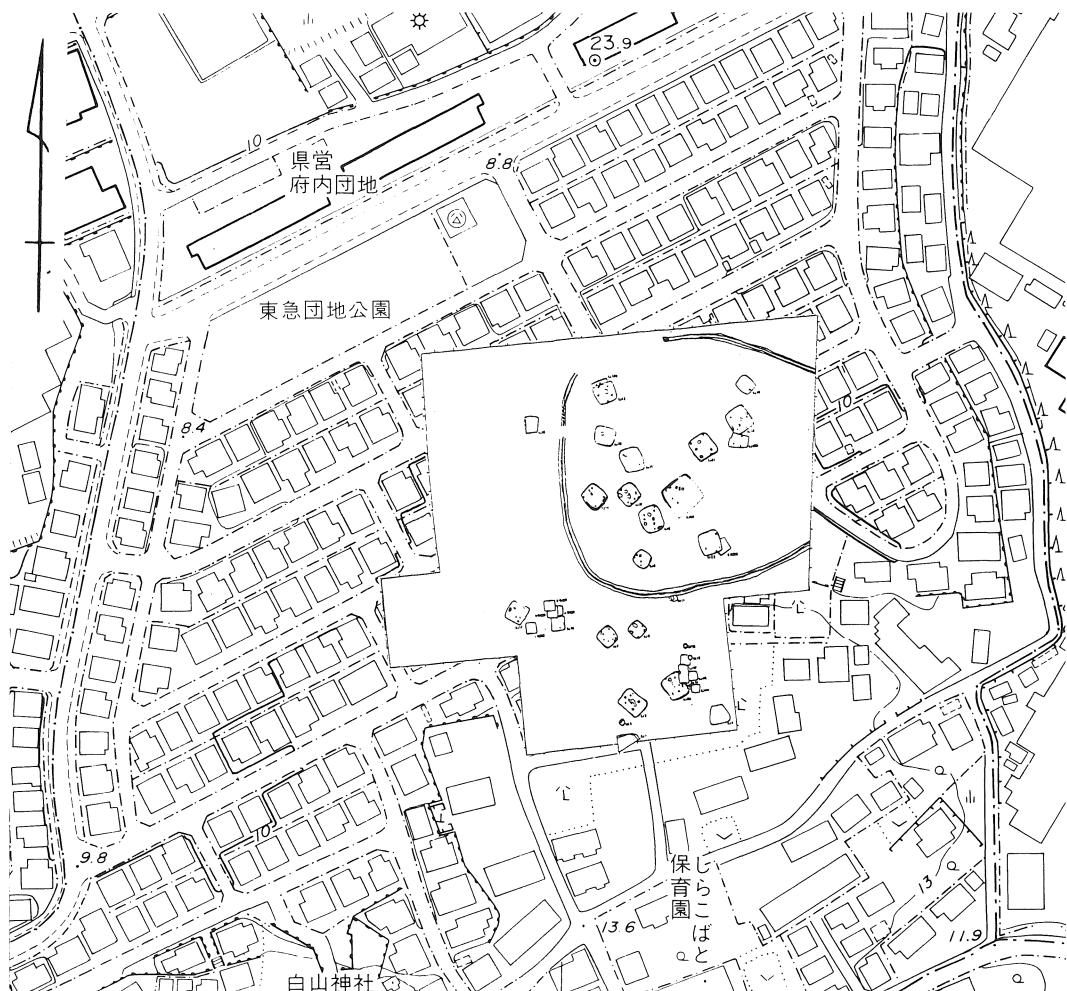
来、集落域と墓域の立地が異なる可能性が強いと考えられる。

3. 木曾良遺跡の概要

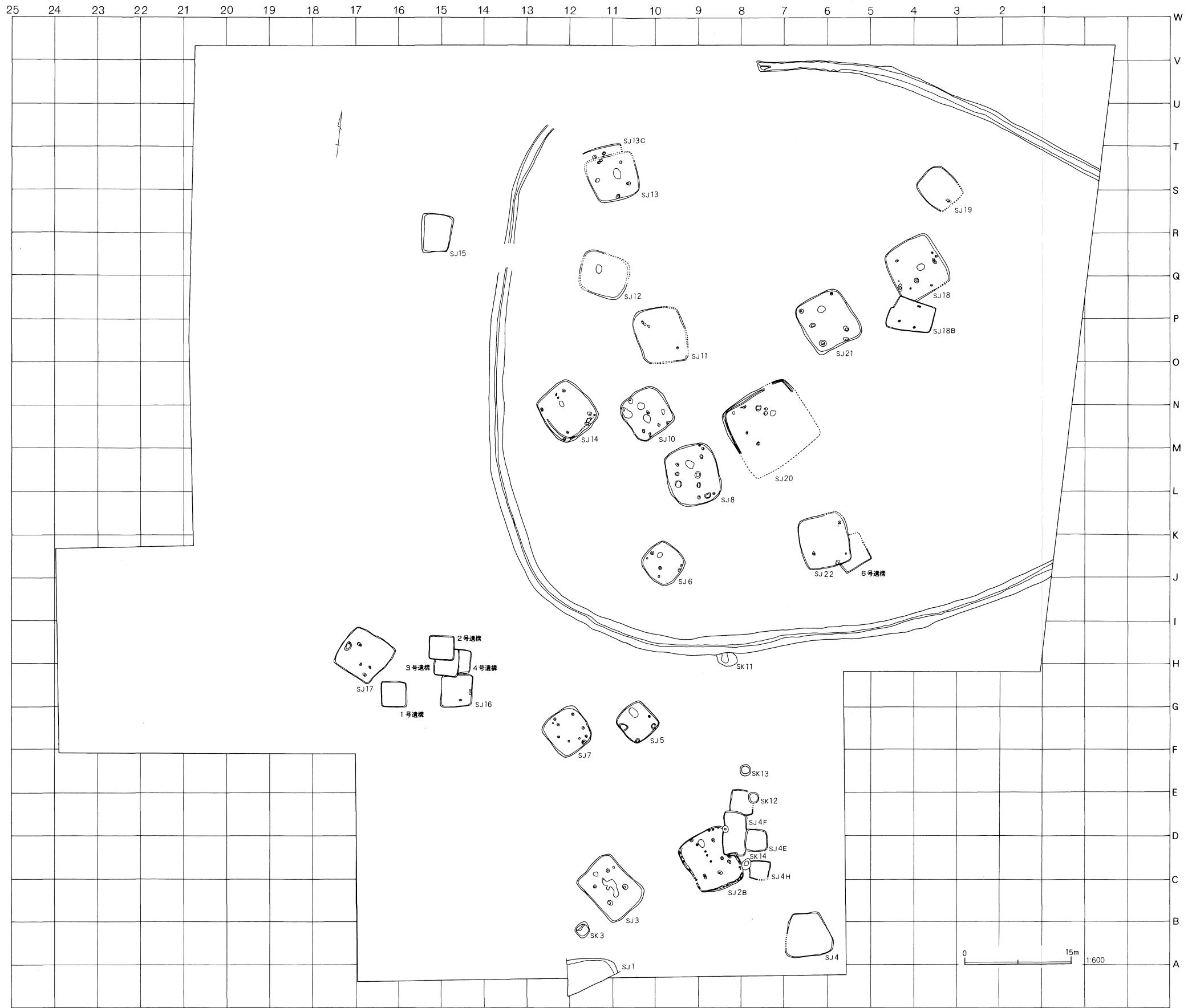
木曾良遺跡は岩槻市大字木曾良字屋敷に所在する。元荒川に向かって南東に突出する台地の基部に当たり、北側は小支谷に続く緩やかな斜面になっている。標高は13m前後で、北側の谷との比高差は3～4 mである。

調査では、縄文時代の地点貝塚3カ所（前期）、住居跡6軒（前期）、土坑8基（前期5基、後期2基）、弥生時代後期の住居跡14軒、環濠1条、中世以後の方形堅穴状遺構12基を検出した。また、遺構は明らかでないが、近世の陶磁器、瓦が多く出土している。

本稿では、この内の弥生時代の遺構・遺物について報告する。縄文時代、中・近世については別途報告する予定である。



第2図 遺跡の現況 (S = 1 : 2,500)



第3図 全測図



弥生時代の集落はいわゆる環濠集落である。環濠内では12軒の住居跡を検出した。重複関係はなく、いずれも3~4mの間隔があり、主軸方向も一定であることと出土土器の様相からほぼ同時期の集落と考えられる。環濠外の住居跡もほぼ同時期と考えられる。

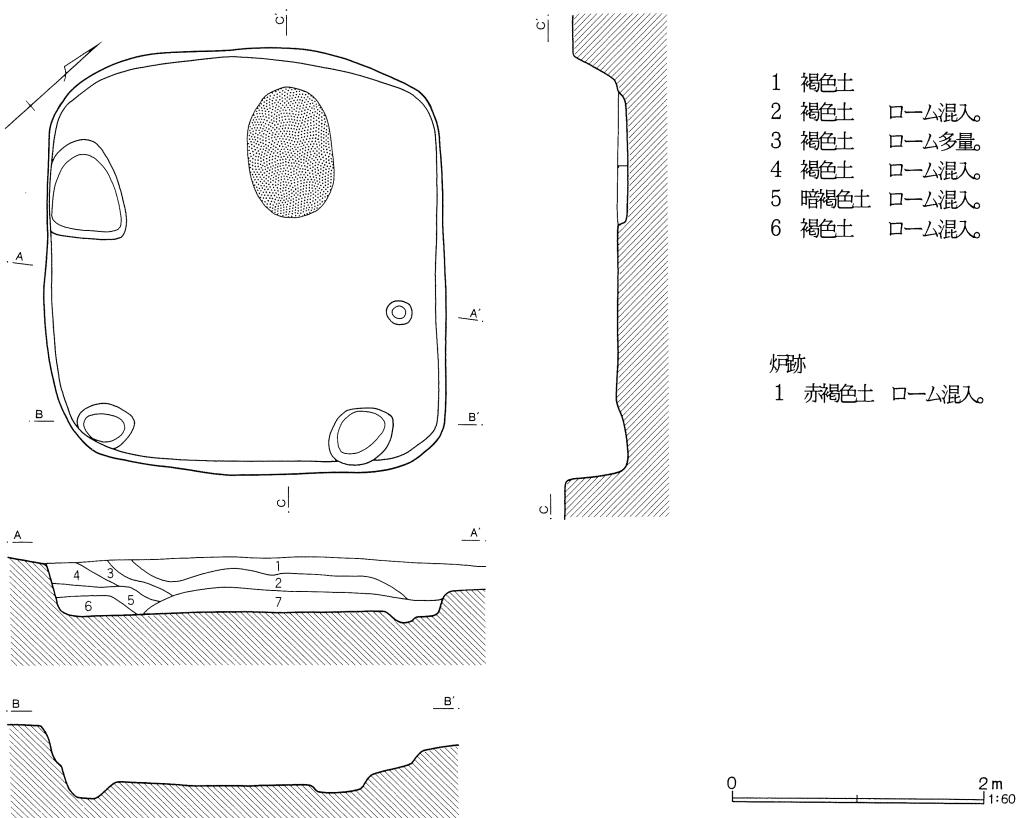
調査主体は埼玉県遺跡調査会、担当者は市川修、昼間孝次である。期間は昭和48年8月13日から12月2日である。

4. 遺構と遺物

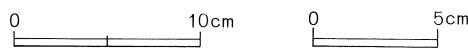
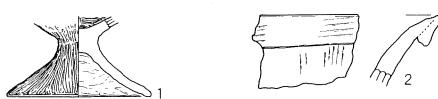
(1) 住居跡

第5号住居跡（第4図）

F-10グリッド周辺に位置する。住居跡の平面形態は隅丸方形で、規模は長軸3.36m、短軸3.18m、深さ0.48m、主軸方向N-48°-Wである。床面状態は良好で中央部は非常に硬化していた。



第4図 第5号住居跡



第5図 第5号住居跡出土遺物

炉跡は平面形態楕円形で長径1.02m、短径66cmである。あまり焼土化しておらず炉床も軟弱であった。ピットは計4基検出されたが主柱穴に想定されるものは検出されていない。

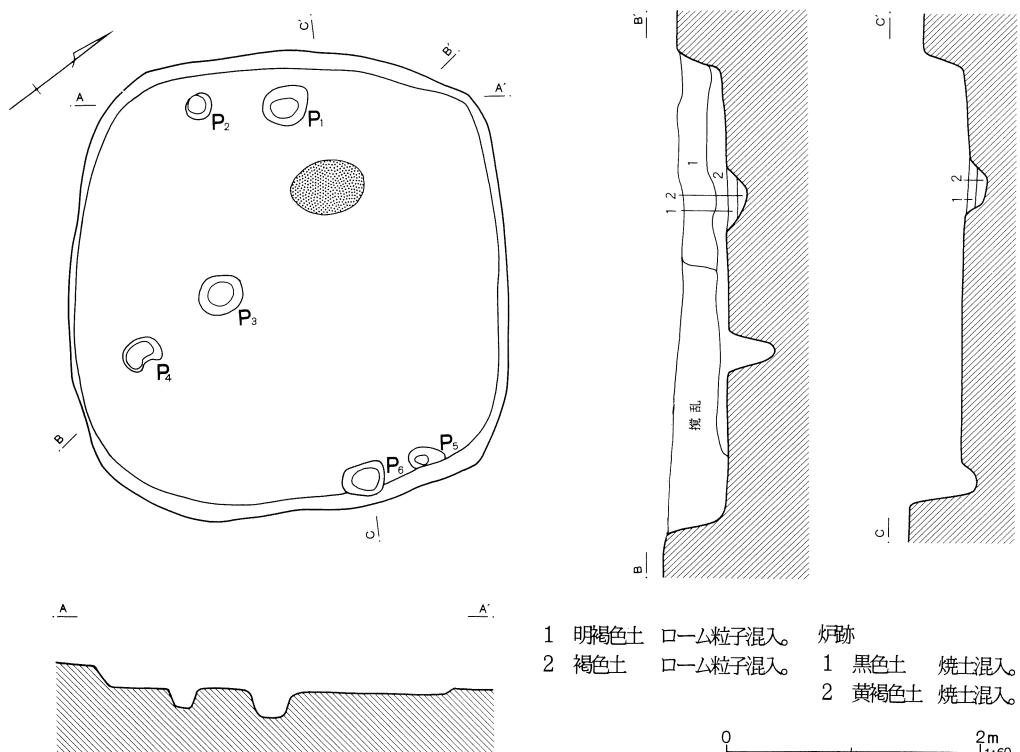
出土遺物は僅少であったが、覆土の様相、住居跡形態等から弥生時代に帰属すると思われる。

第5号住居跡出土遺物（第5図）

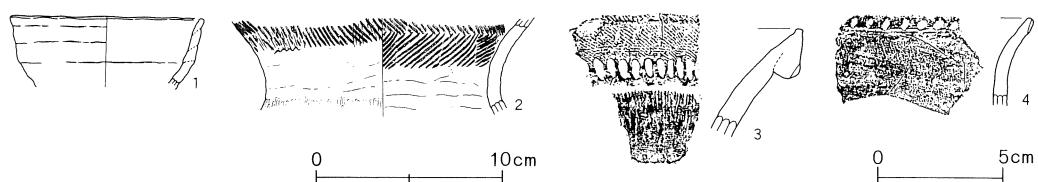
1は小形の高壙脚部である。本遺構覆土中と環濠覆土中出土との接合資料である。外面と壙部内面はヘラミガキ後赤彩される。2は壺口縁部である。断面三角形の折り返し状口縁である。

第6号住居跡（第6図）

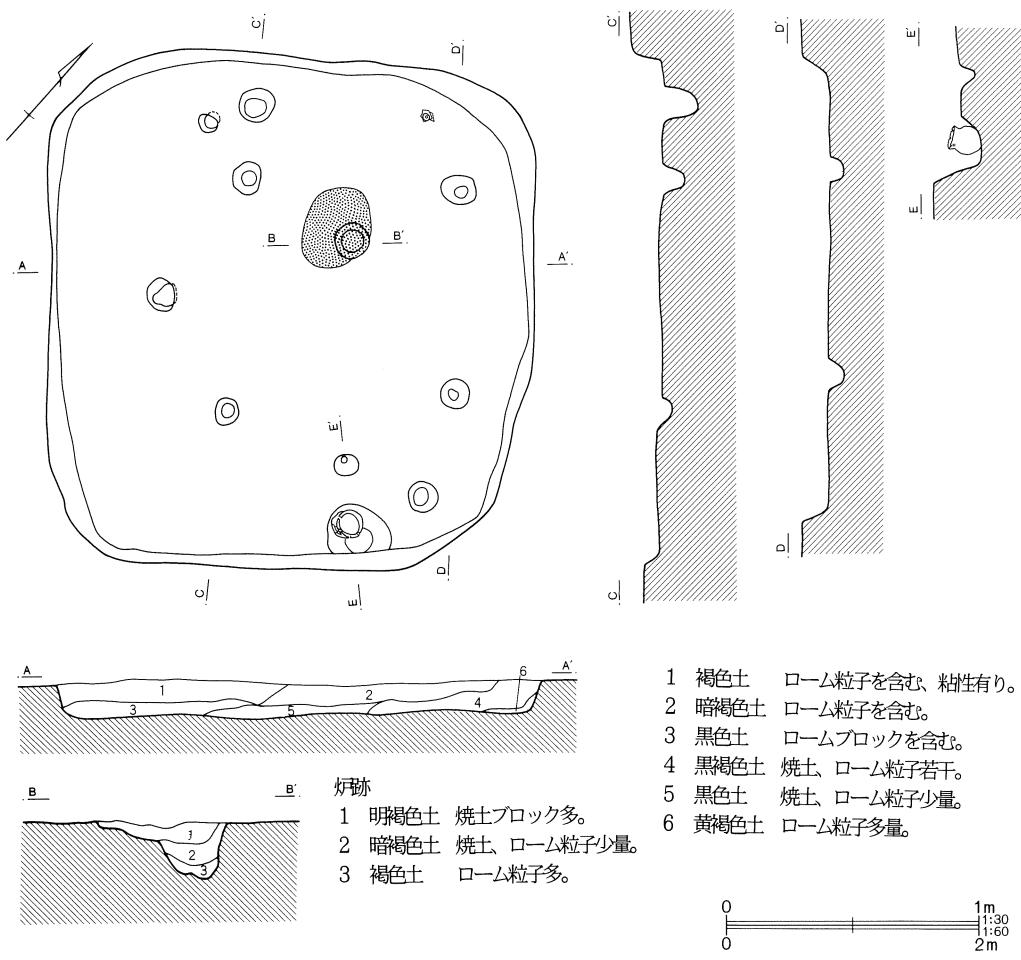
J-9グリッド周辺に位置する。住居跡の平面形態は隅丸方形で、規模は長軸3.60m、短軸3.48m、深さ42cmである。主軸方向はN-54°-Wである。南側は攪乱を受けていたが、床面の状況は良好であった。炉跡は北壁寄りから検出されている。平面形態は楕円形で長径60cm、短径40cm、深さ15cm程である。ピットは計6基検出されている。出土遺物は少数である。



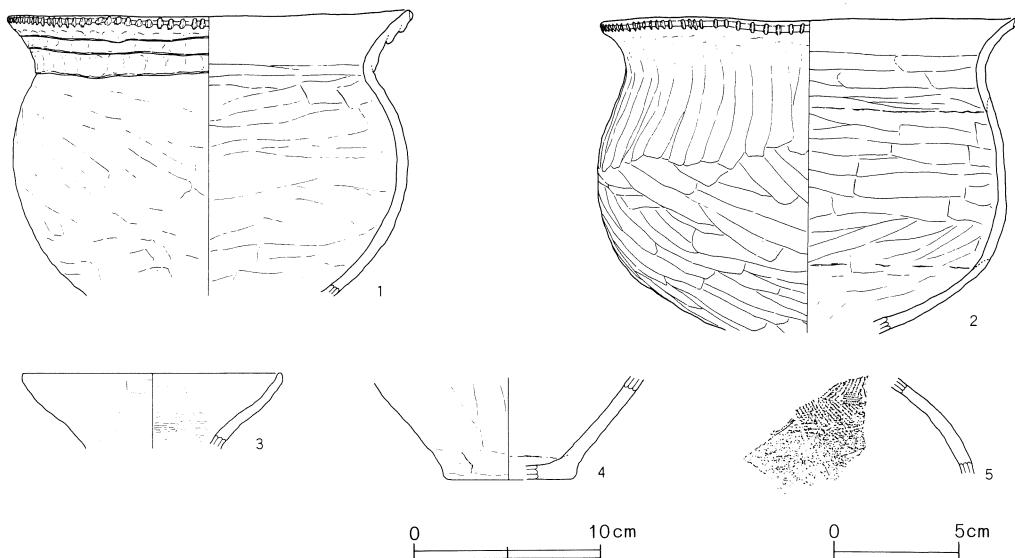
第6図 第6号住居跡



第7図 第6号住居跡出土遺物



第8図 第7号住居跡



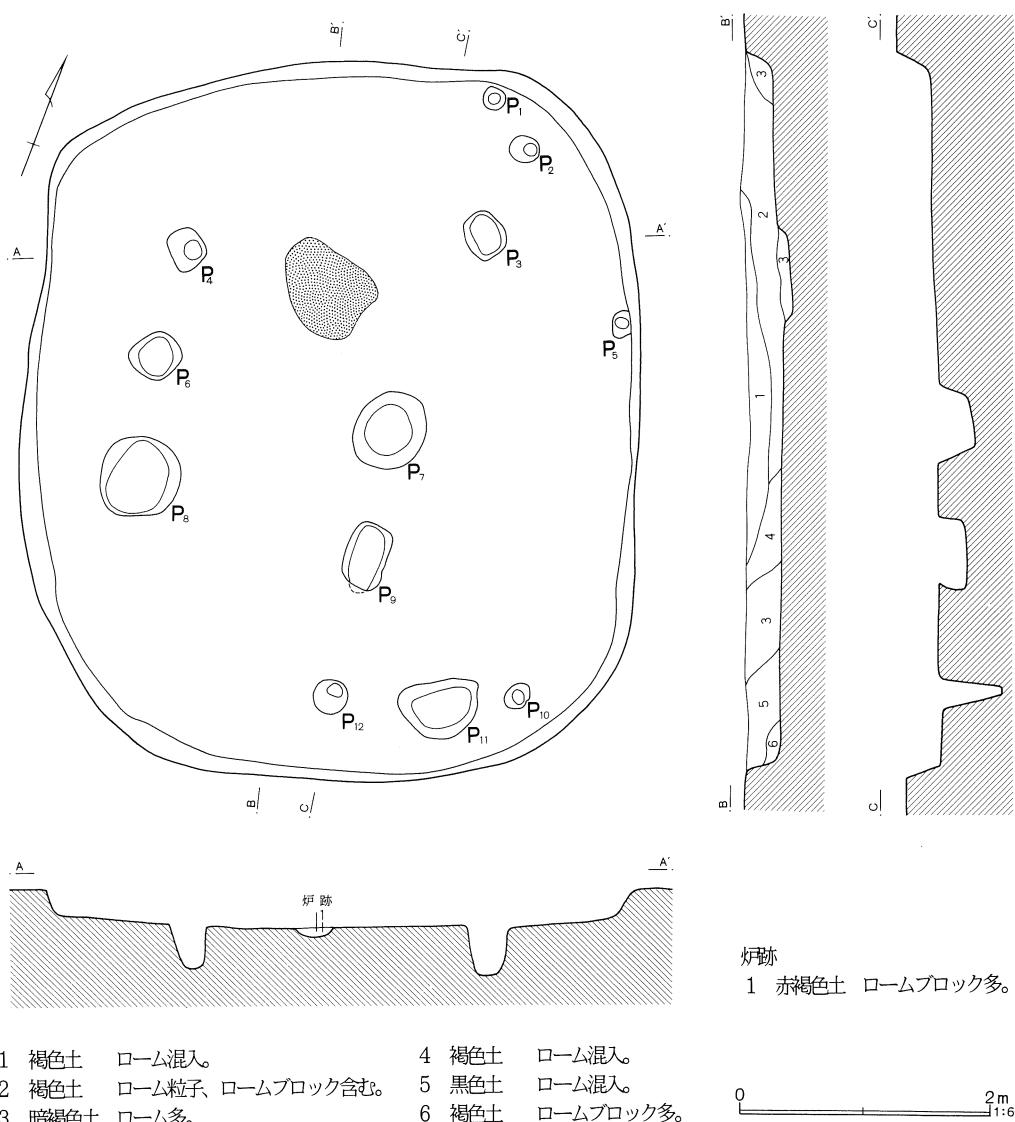
第9図 第7号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物（第7図）

1は小形の鉢である。輪積み痕が明瞭に残る。内外面赤彩。2は壺形土器の頸部である。内外面縄文施文される。3は壺口縁部片である。断面形態三角形の折り返し状口縁である。口縁部と端部にRL縄文が施文され、下端には工具により刻み目が施される。4は台付甕口縁部である。棒状工具により刻み目が施される。いずれも覆土中出土である。

第7号住居跡（第8図）

F-12グリッド周辺に位置する。住居跡の平面形態は隅丸方形で、規模は長軸4.02m、短軸3.84m、深さ30cmである。主軸方向はN-41°-Wである。床面はやや軟質であった。炉跡は中央北よりから検出された。



第10図 第8号住居跡

平面形態は不整橿円形で長径66cm、短径54cmである。また炉跡下から径30cmほどのピットが検出された。ピットは計10基検出された。南壁に接するP 11は貯蔵穴と思われる。底面直下から1の甕が正位で出土した。P 1～P 4は1.7～1.8m間隔で並んでおり主柱穴の可能性もある。覆土中から多量の縄文土器が出土したが、覆土下層以下からは弥生土器が出土した。

第7号住居跡出土遺物（第9図）

1の甕は球形の胴部と3段の輪積み痕を有する口縁部からなる。輪積み部には指頭圧痕が残る。頸部の屈曲は強い。棒状工具により端部に刻み目が施される。2の甕は最大径を胴部下位に有し、やや下膨れの形態となる。胴部下半斜位ヘラナデ、口縁部～胴部上位縦位ヘラナデ、内面横位ヘラナデである。3は内外面赤彩される。鉢と思われる。5の壺胴部には円形朱文が施文される。

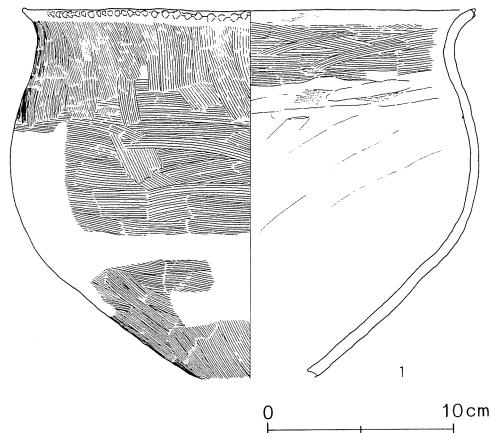
第8号住居跡（第10図）

L—9グリッド周辺に位置する。およそ2m東には第20号住居跡、2m北には第10号住居跡が隣接する。住居の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸5.65m、短軸4.90m、深さ28cmである。主軸方向はN—22°—Wである。床面は堅く、中央部やや北壁寄りで炉跡が検出されている。炉跡は不整橿円形で、長径75cm、短径70cm、深さ10cmほどである。

ピットは、11基検出されている。中央部やや北壁寄りのP 3とP 4は深さ35cmほどで間隔は2.4mである。主柱穴の内の2本と思われるが、南側に対応するピットは検出されていない。P 8は覆土中より銅錢が出土しており、当住居跡には伴わない。覆土中から台付甕が1点出土している。

第8号住居跡出土遺物（第11図）

1は脚部欠損の台付甕である。胴部やや上位に最大径を有し、薄い器壁の口縁部は緩やかに外反する。平坦面を作出された端部にはヘラ状工具により浅い刻み目が施される。外面は胴部下半縦位ハケメ、中位横位ハケメ、口縁から頸部は縦位ハケメ。頸部内面は横・斜位ハケメ、以下横斜位ヘラナデ。下半は被熱による劣化が著しい。



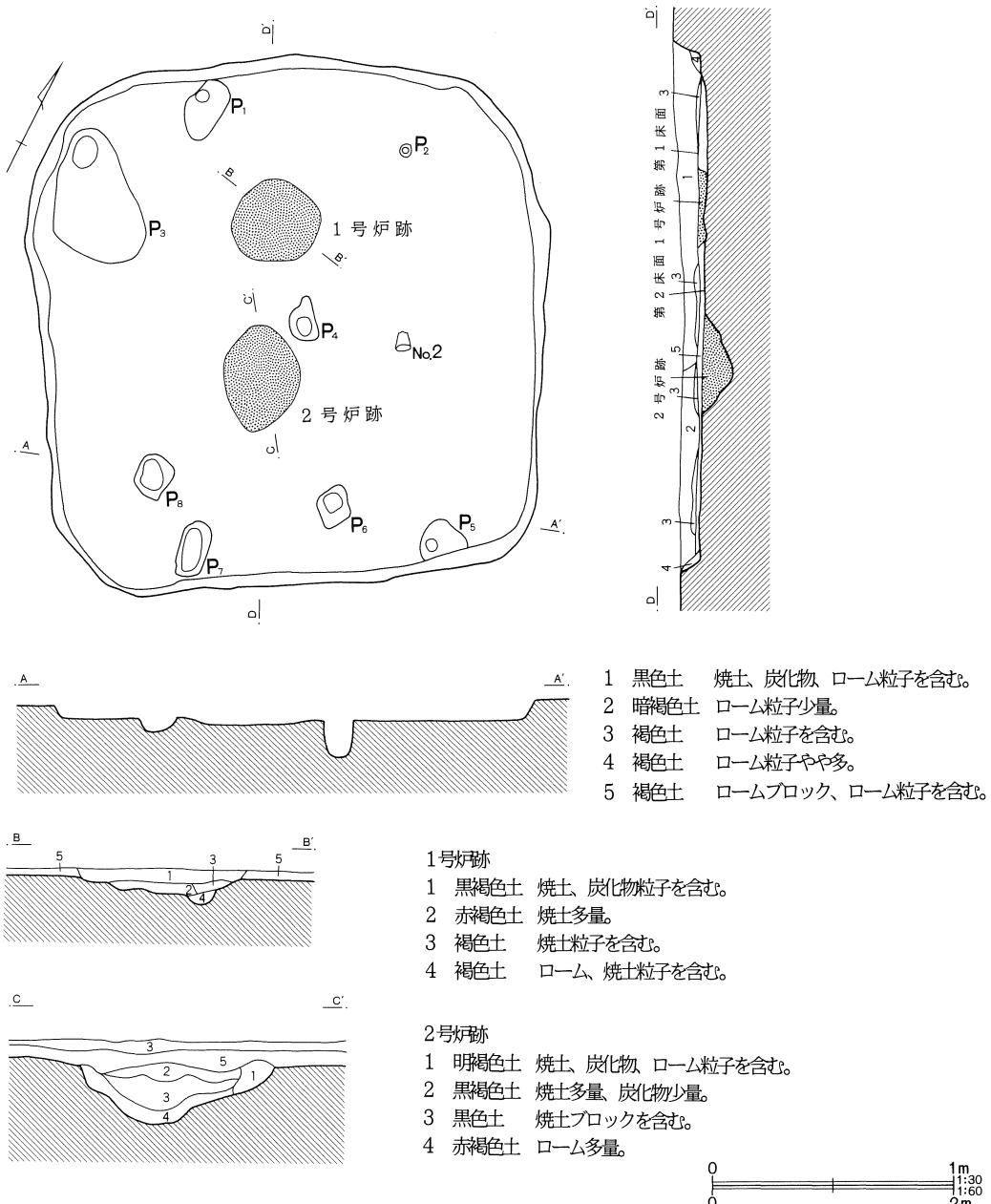
第11図 第8号住居跡出土遺物

第10号住居跡（第12図）

M—10グリッド周辺に位置する。住居の平面形は方形で、規模は長軸4.30m、短軸4.15m、深さ27cmである。主軸方向はN—31°—Wである。床面は、1mm弱の黒色土層を間層として、上下2面の貼床が検出されている。

炉跡も2ヵ所検出されているが、2号炉跡は第2床面下に存在し、条痕文系土器片の出土が調査日誌に記されており、縄文時代の炉穴の可能性が高い。1号炉跡は、中央部やや北壁寄りに位置し、長径75cm、短径68cm、深さ7cmほどである。ピットは、8基が検出されているが、不規則な配列で主柱穴と認定できるものはない。

遺物は比較的多数出土したが、床面から浮いた状態のものが多い。南壁側東寄りのP 5からは土



第12図 第10号住居跡

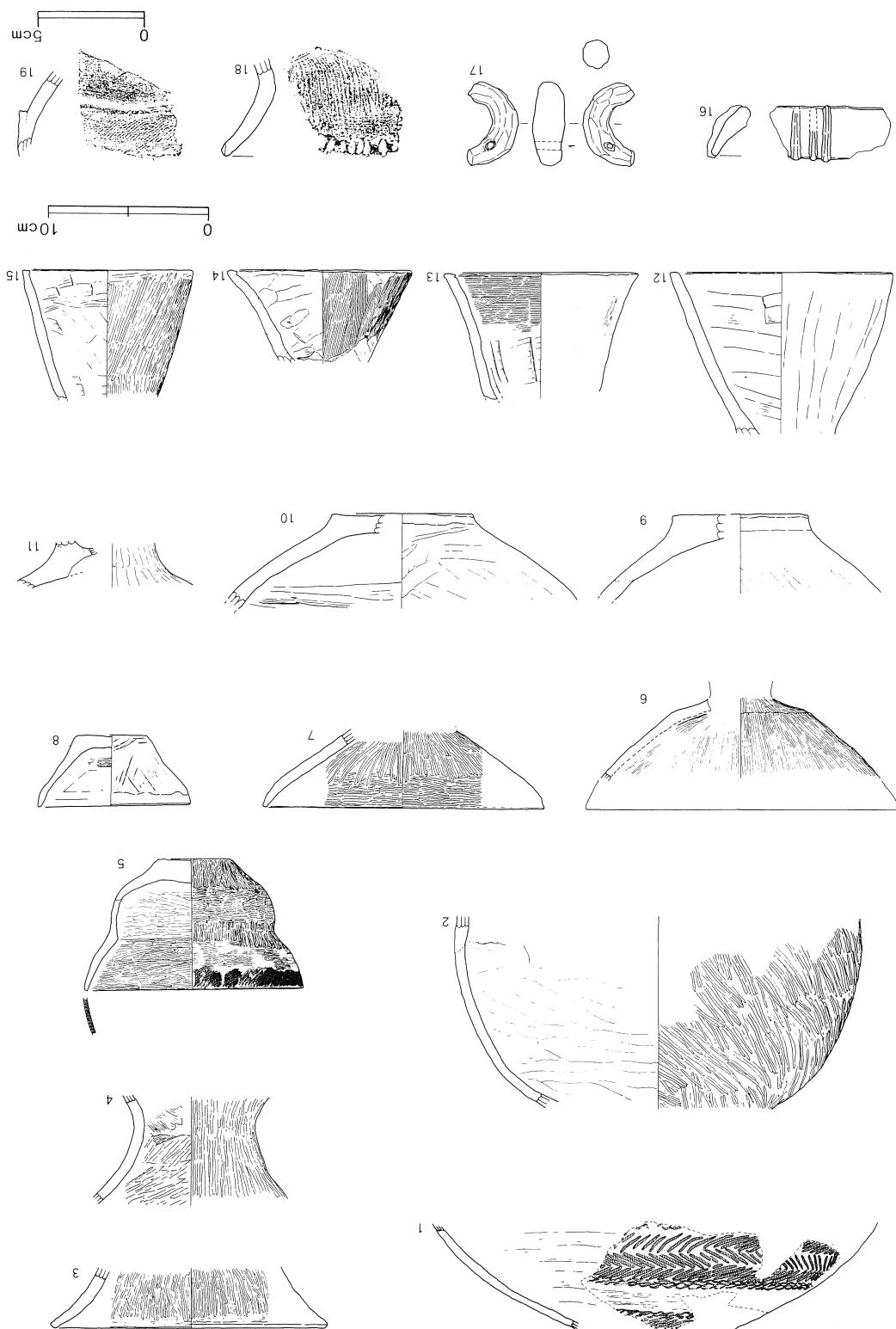
製勾玉が出土している。

第10号住居跡出土遺物（第13図）

1は壺形土器肩部である。付加状縄文および結節紋が認められる。軸縄の痕跡は認められない。S字状結節は3段認められる。無文帯のみ赤彩される。焼成良好。なお本資料は環濠覆土中と接合したため本遺構に帰属する確証はない。

2～4はいずれも壺であるが、別個体と思われる。いずれも赤彩され、外面調整はヘラミガキで

第13图 第10号住居跡出土遺物

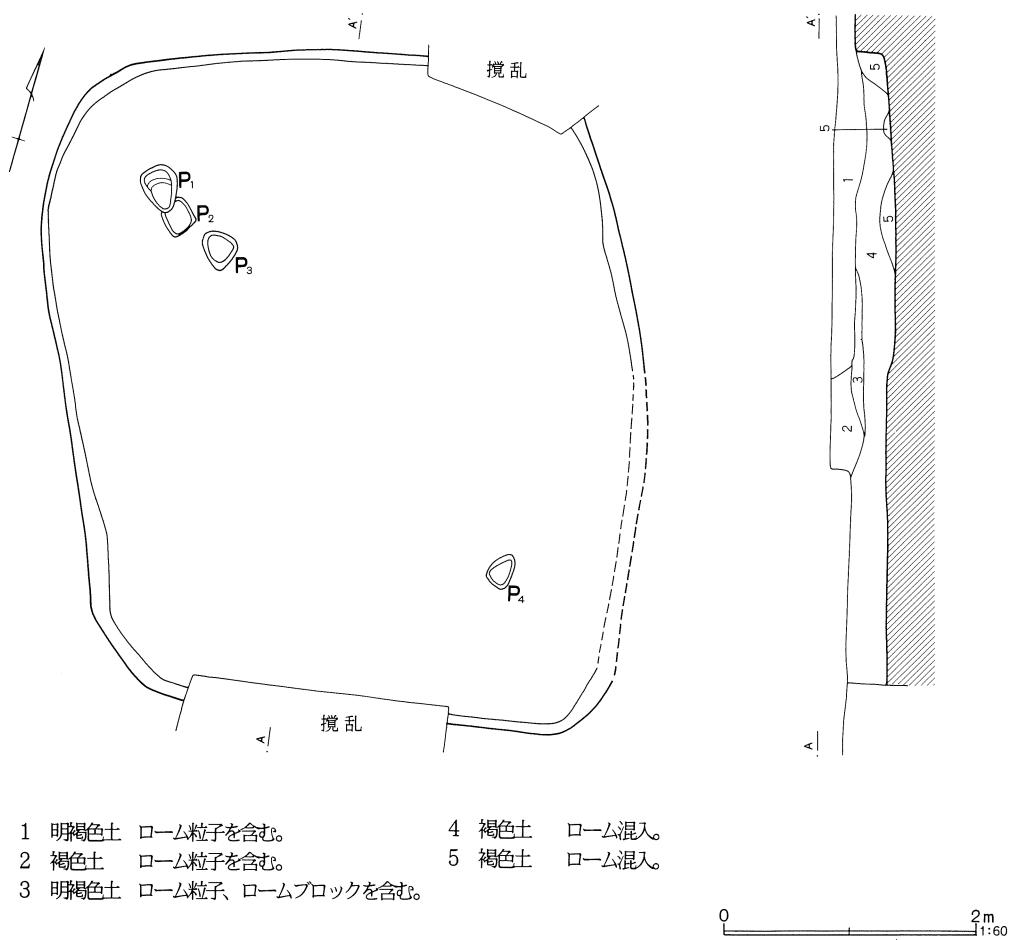


ある。2には破碎後の二次被熱痕が残る。5の小形の壺は口縁部に单節LRを施文し円形朱文が配される。5単位残存し、推定で8単位と思われる。端部は平坦面作出後に口縁部と同一の原体により繩文施文される。繩文施文域以外内外面赤彩される。

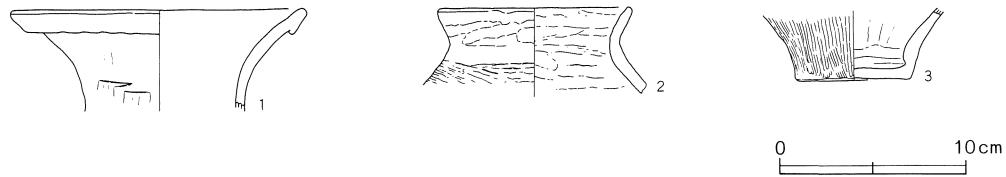
6の高坏は覆土中から出土した。残存率が低く、内面は剥離している。坏部下位に明瞭な稜が作出される。焼成良好で褐色を呈する。7の高坏は口縁部に向かい大きく開き上位で小さく立ち上がる。内外面とも上位横位ヘラミガキ、以下縦位ヘラミガキである。8は完形の鉢である。口縁部上位は小さく直立する。内外面ヘラナデ調整される。16は壺形土器口縁部片である。無文の口縁部に縦位の3個1単位となる棒状浮文が配される。内面は赤彩される。17は土製勾玉である。指頭により成形され一方向から穿孔される。孔周辺には粘土のバリが遺存する。焼成は良好である。19の高坏は折り返し状口縁に繩文施文される。坏部は赤彩される。

第11号住居跡（第14図）

O—9グリッド周辺に位置する。北壁付近及び南壁付近は攪乱を受けている。住居の平面形は歪んだ長方形である。規模は長軸5.30m、短軸4.60m、深さ30cmである。主軸方向はN—16.5°—Wである。床面は、極めて堅い。明瞭な炉跡は検出されていない。「覆土中（床面より30cm位上）に焼土



第14図 第11号住居跡



第15図 第11号住居跡出土遺物

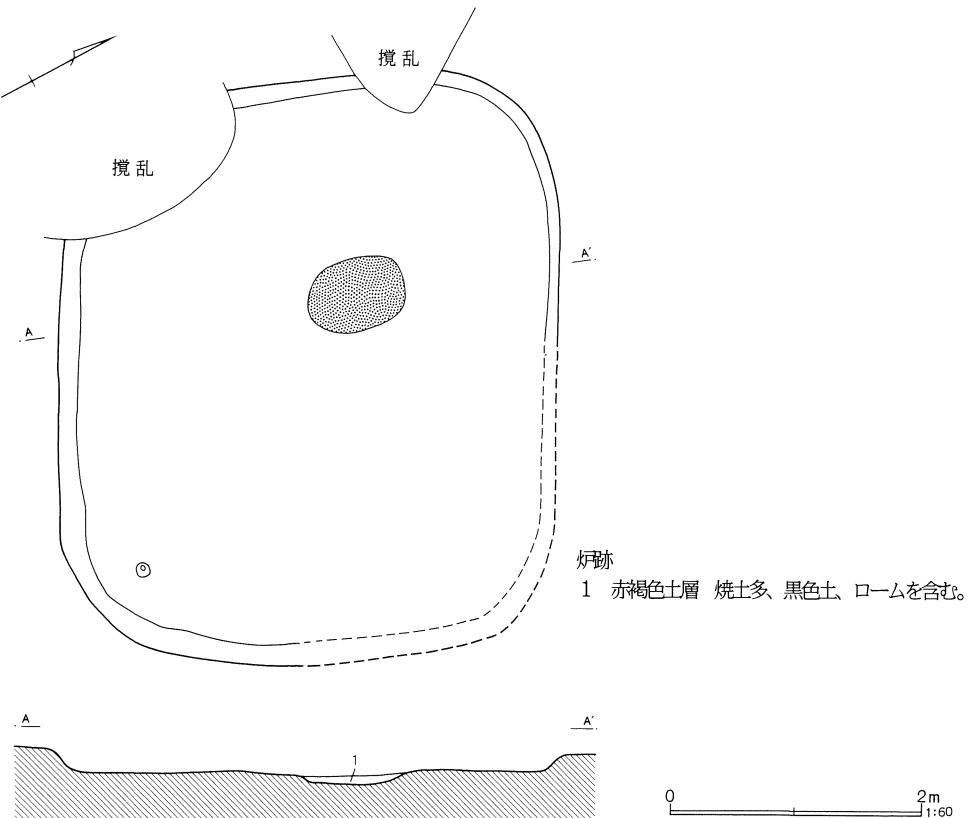
と炭化物が1cmほどの厚さで環状に現れた」旨の記述が調査日誌に見られるが、住居の炉跡とは思われない。ピットは、4基が検出されているが、性格は不明である。遺物は覆土下層から出土している。

第11号住居跡出土遺物（第15図）

1の壺形土器は折り返し状口縁で内面に赤彩痕が残る。端部は僅かに丸みを帯びる。外面はヘラナデ調整である。2の壺形土器も外面および口縁内面に赤彩が認められる。外面口縁部ヘラナデ、胴部横位ヘラミガキである。

第12号住居跡（第16図）

Q-11グリッド周辺に位置する。攪乱および溝の影響で遺存状況は悪く、北東コーナー部は検出できなかった。主軸方向はN-63°-Wである。長軸4.60m、短軸3.90mの隅丸長方形である。遺構



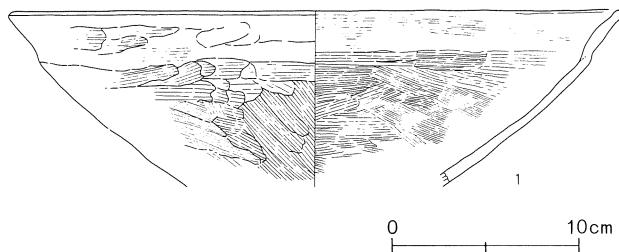
第16図 第12号住居跡

確認面からの深さは18cmである。炉跡は橢円形を呈し長径78cm、短径54cm、深さ6cmである。

第12号住居跡出土遺物（第17図）

1は推定口径32.8cmと大形の高坏である。大きく開く体部から明瞭な段を有し口縁部となる。端部と内面に赤彩が認められる。

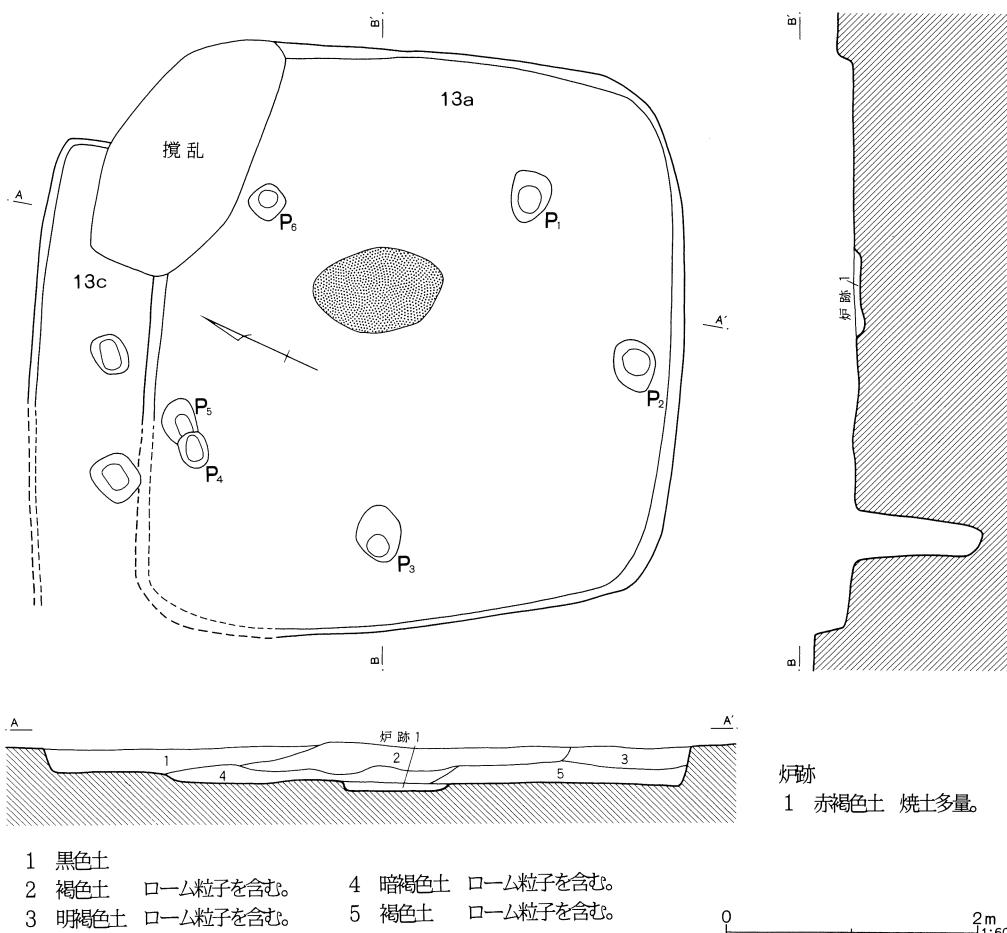
外面調整は口縁部ヨコヘラナデ後ヨコナデ、中位ヨコヘラナデ、下位ナナメヘラナデ後一部ナデ消しである。内面調整は口縁部ヨコヘラナデ後ヨコナデ下位ヨコヘラナデである。



第17図 第12号住居跡出土遺物

第13号住居跡（第18図）

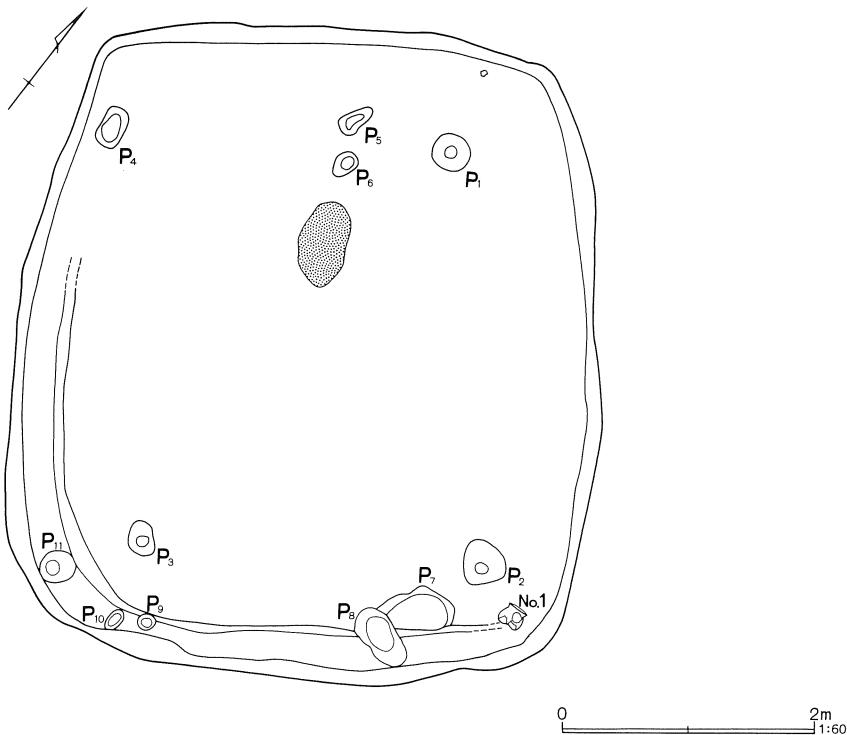
S-10グリッド周辺に位置する。時期不詳の第13C住居跡に切られる。北東コーナー一部は攪乱により確認されていない。主軸方向はN-65°-Eである。長軸4.6m、短軸4.3mの隅丸方形を呈する。遺構確認面からの深さは30cmであ



第18図 第13号住居跡

る。

炉跡は楕円形を呈し長径100cm、短径66cmである。6cmほど焼土堆積が認められた。ピットは計6基検出された。P1、6の間隔はおよそ2mで主柱穴の可能性があるが、西側に対応すべきピットはなかった。なお主軸ライン上のP3は100cmと深い。図化可能な遺物は出土していない。

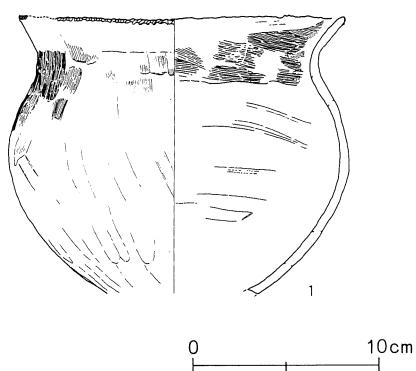


第19図 第14号住居跡

第14号住居跡（第19図）

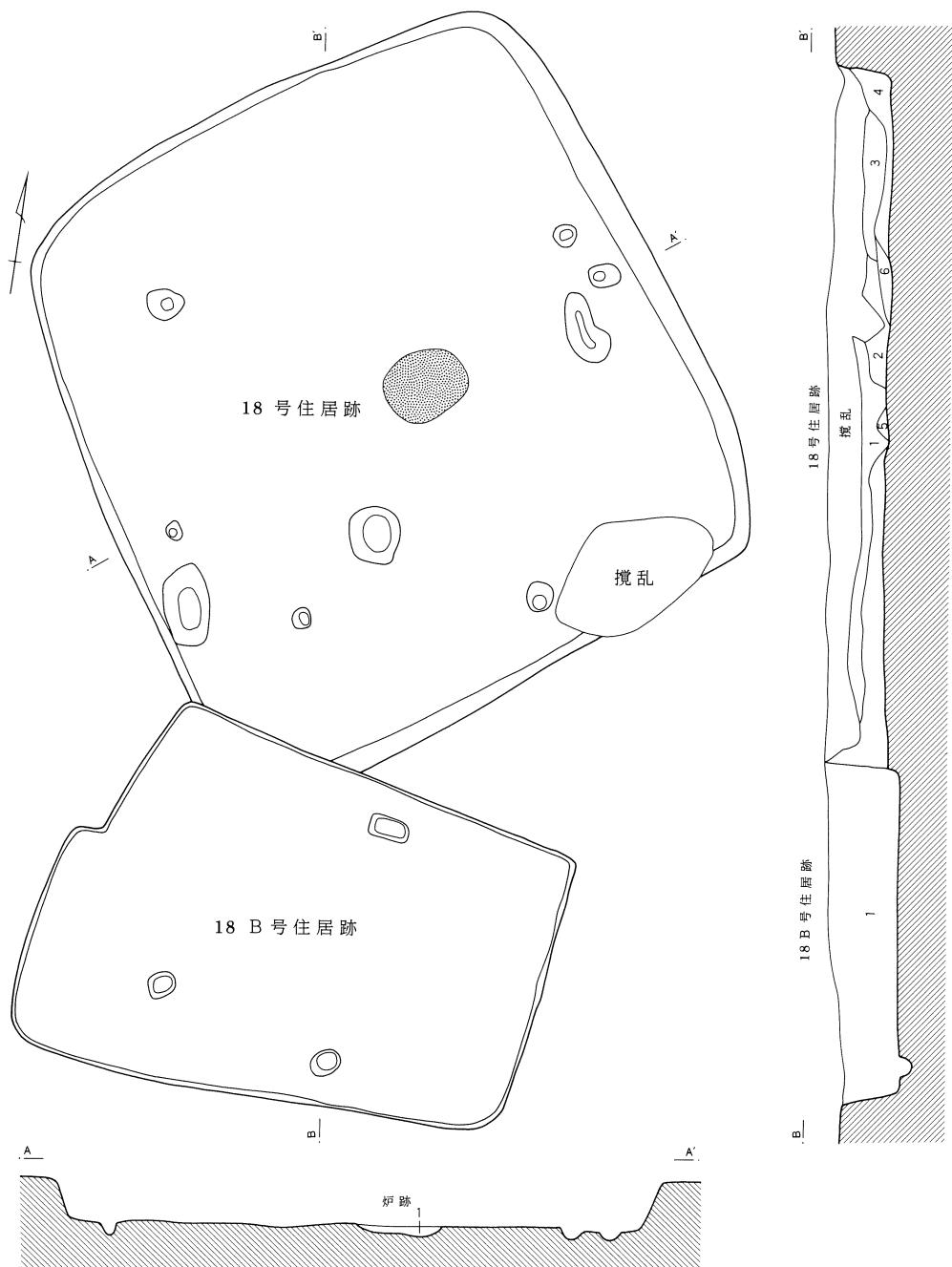
M—11グリッド周辺に位置する。東方2mに第10号住居跡、西方3mには環濠がある。長軸5.20m、短軸4.40mの隅丸長方形である。主軸方向はN—35°—Wである。覆土は黒褐色土で焼土等の含有は見られなかった。

炉跡は不整楕円形を呈し、長径66cm、短径39cmである。主柱穴と思われるピットは4ヶ所検出されたが、住居跡形態からするとやや不規則な配置である。また幅広の壁溝が南壁から西壁にかけて検出された。数基のピットが検出された。南壁際には壁溝と隣接し、長さ60cmほどの不整楕円形のピットが検出された。炉の北側からも直列するように小ピットが2基検出されている。



第20図 第14号住居跡出土遺物

遺物は南東コーナー部の壁溝肩部の床面から



18号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量。
- 3 黒褐色土 ローム粒子を全体的に、ロームブロックを若干含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子やや多、焼土を若干含む。
- 5 赤褐色土 焼土多量。
- 6 黒色土 ローム粒子、焼土少量。

炉跡

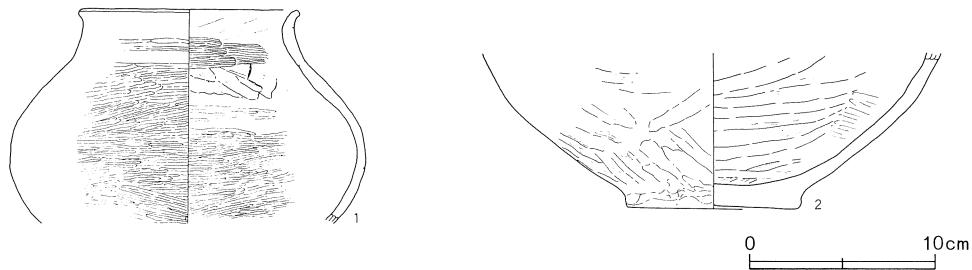
- 1 赤褐色土 焼土多。

18B号住居跡

- 1 褐色土 ローム少量。

0 2m 1:60

第21図 第18号住居跡



第22図 第18・19号住居跡出土遺物

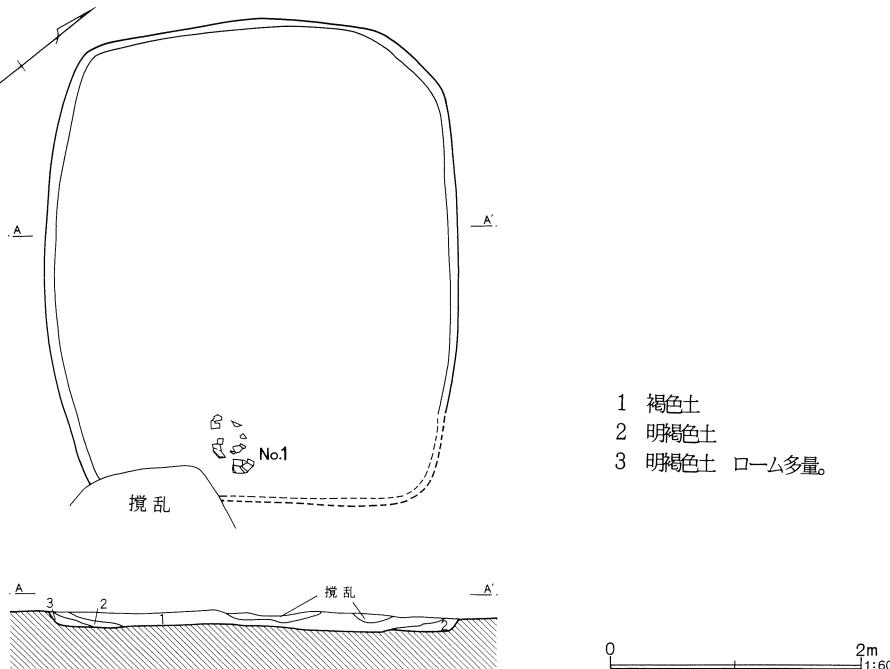
10cm浮いたところから台部を欠損した台付甕が出土している。覆土中からは数片の土器片が出土したのみである。

第14号住居跡出土遺物（第20図）

1は最大径を胴部中位に有する台付甕である。残存率は90パーセントと高い。頸部屈曲は弱い。口縁端部はやや丸みを帯びるが面取りされ、ハケメ状工具によりピッチの細かい刻みが施される。外面頸部～胴部上位縦位ハケメ、以下縦位ヘラナデ、口縁内面横位ハケメ、以下横位ヘラナデである。ハケメは非常に細かい。

第18号住居跡（第21図）

Q—3グリッド周辺に位置する。隅丸方形で南西コーナー一部を18B号住に切られ、南東コーナー部を攪乱により壊される。主軸方向はN—56°—Wである。規模は長軸5.30m、短軸5.0m、深さ48cmである。覆土はローム粒子、ロームブロックを多量に含有する。炉跡は住居跡中央やや東寄りに検出された。橢円形で、長径72cm、短径60cmとやや大形である。ピットは計9基検出されたが、不

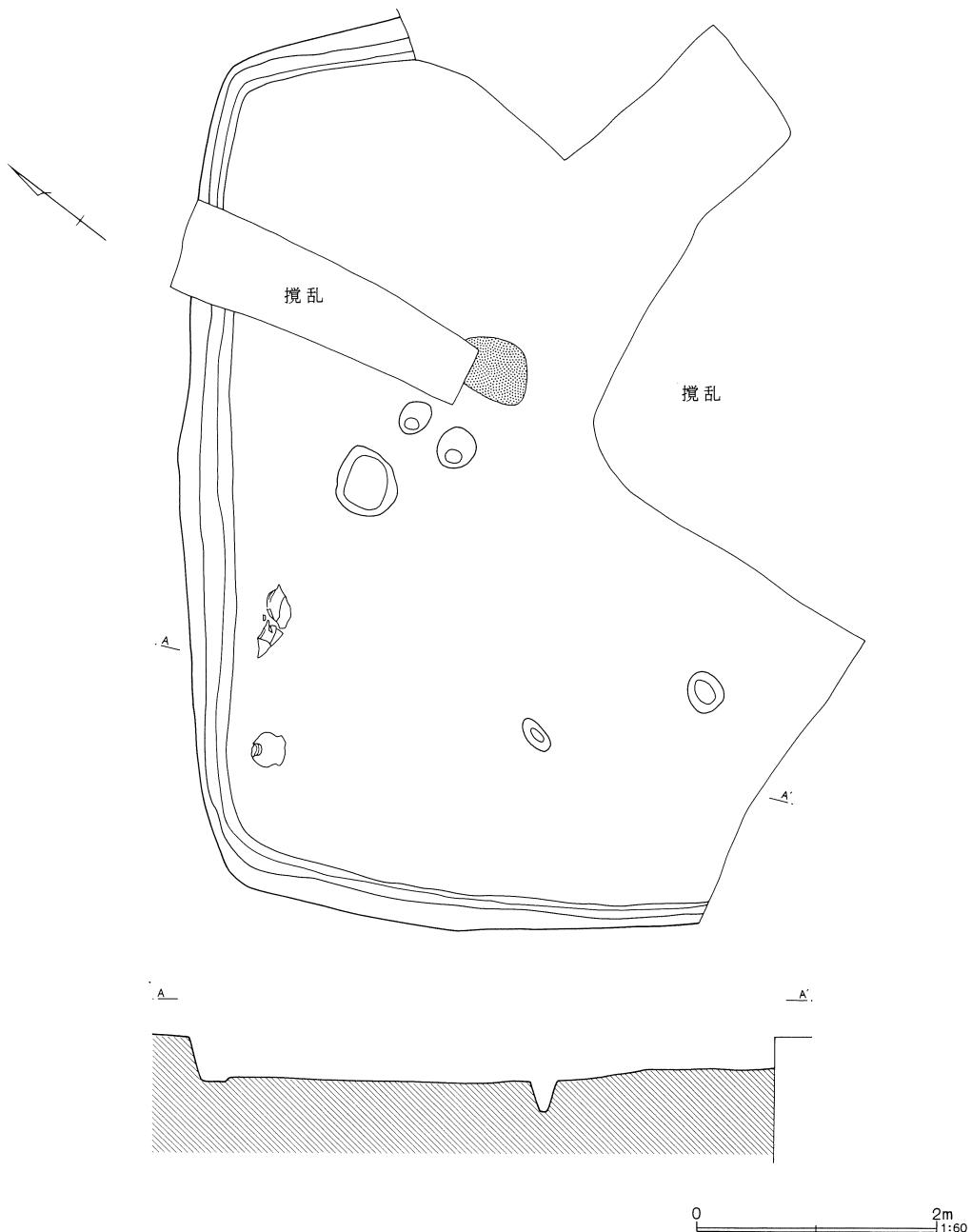


第23図 第19号住居跡

規則な配置で主柱穴とは認定できない。床面は壁際以外堅緻であり、特に炉跡南側の硬化が顕著であった。

第18号住居跡出土遺物（第22図）

1の短頸壺は算盤玉状に張り出した胴部から緩やかに頸部に移行し口縁上位が小さく外反する。外面緻密な横位ヘラミガキである。内面も胴部中位以下は緻密なヘラ磨きである。



第24図 第20号住居跡

第19号住居跡（第23図）

S-3 グリッド周辺に位置する。丸みを帯びた長方形で、西壁は攪乱により破壊されていた。炉、ピットは検出されなかった。主軸方向はN-53°-Wである。規模は短軸3.20m、長軸方向は不明だが3.5m以上と推定される。深さは20cmで、浅い。

第19号住居跡出土遺物（第22図）

1は南壁よりから出土した甕胴部下半である。内外面、底面ともヘラナデされる。

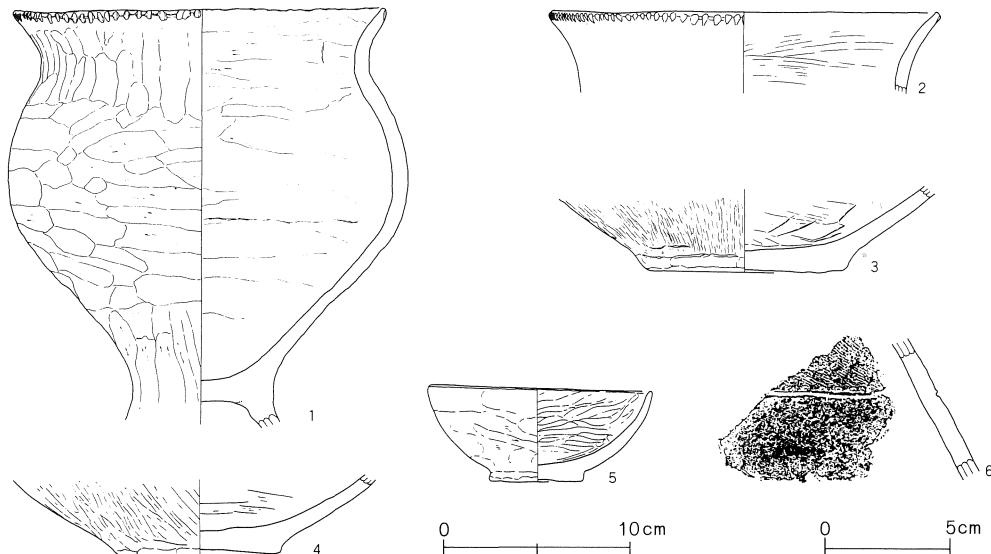
第20号住居跡（第24図）

M-7 グリッド周辺に位置する。隅丸方形で、壁溝が巡る。遺構の南側と東側は攪乱に壊されていた。また、遺構の中央も木の攪乱により破壊されていた。主軸方向はN-53°-Eである。規模は長軸7.50m、短軸は攪乱により不明だが5.60m以上になると考えられる。深さは35cmである。炉は不整形で、中央より東側に偏していた。長軸55cm、短軸48cmである。ピットは5基検出されたが、柱穴となるものは認められない。

遺物は床面から、壺の胴部下半、脚台部を欠失する台付甕が出土した。

第20号住居跡出土遺物（第25図）

1の台付甕は最大径を胴部中位に有し、口縁部は緩やかに外反する。端部は平坦面作出後、下方



第25図 第20図住居跡出土遺物

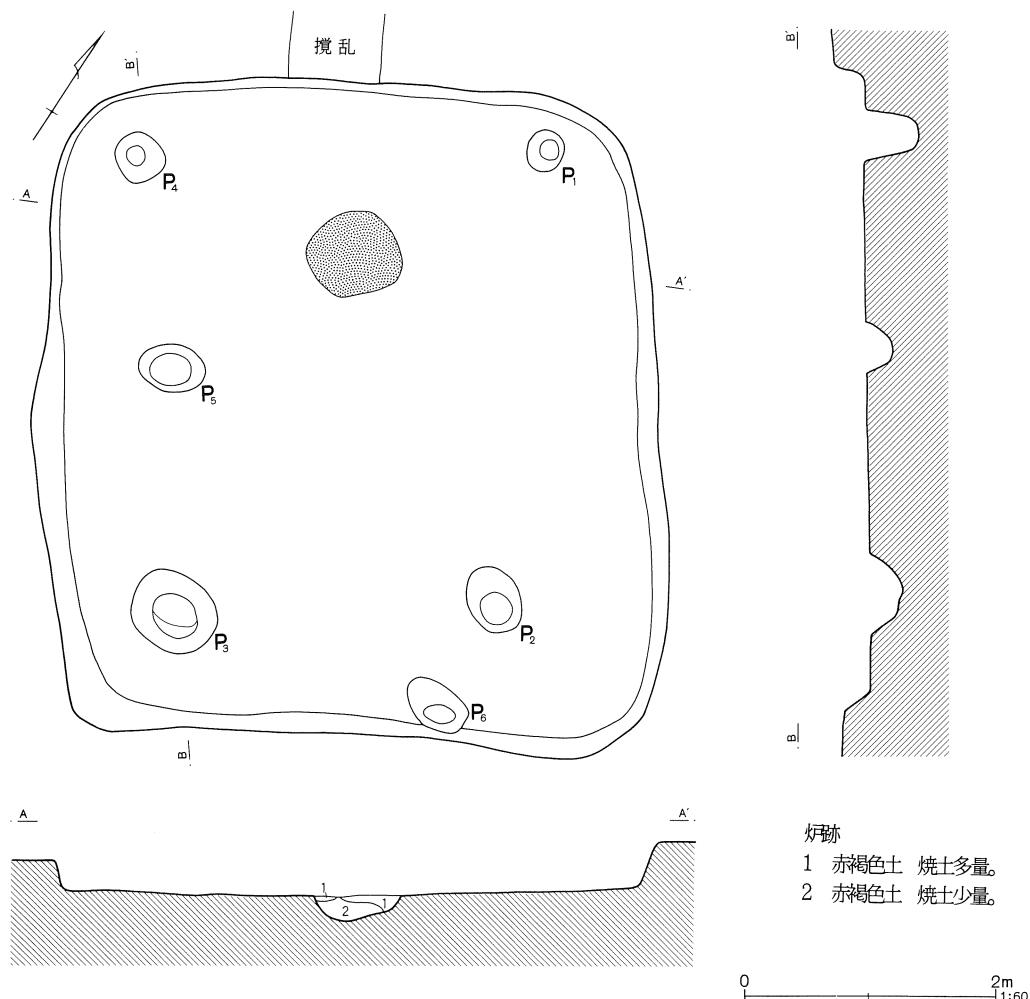
から棒状工具により刻みが施される。内外面ヘラナデ調整される。外面の胴部から口縁部に煤が付着している。胎土中に赤色粒子を多量に含有する。

2の甕の口縁部下端には棒状工具により刻み目がき施される。

5の鉢はほぼ完形である。外面調整は口縁部雑な横位ナデ、以下横位ヘラナデである。端部は丸く収められる。内面はミガキ様の横位ヘラナデである。内外面とも赤彩される。

6は大形の壺胴部片である。S字状結節文が施文されるが、その下端は幅2mmほどの幅狭の沈線

で区画される。無文部は赤彩される。4は壺形土器底部である。底面はわずかに上げ底状となる。外面は赤彩される。



第26図 第21号住居跡

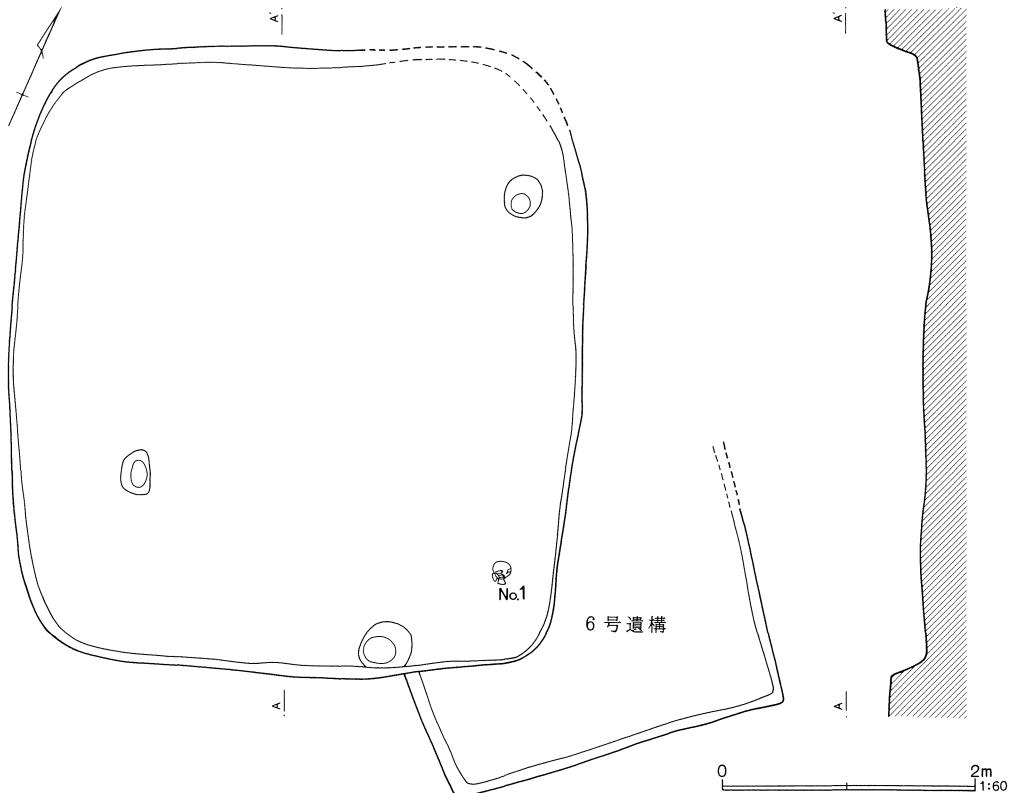
第21号住居跡（第26図）

O—6グリッド周辺に位置する。隅丸長方形で北壁の一部を攪乱により破壊されていた。主軸方向はN—35°—Wである。規模は主軸5.30m、短軸4.90m、深さ25cmである。炉は径70cm、深さ20cmの不整円形で、北壁に偏している。ピットは6基検出され、その内P₁～P₄の4本が柱穴と考えられる。床面は良くしまり、パリパリの状態であった。

遺物は甕の小破片のみで、図示できるものは出土しなかった。

第22号住居跡（第27図）

J—6グリッド周辺に位置する。隅丸長方形で中世の6号竪穴状遺構に切られ、北西コーナーを攪乱により破壊されていた。主軸方向はN—24°—Wである。規模は長軸方向4.95m、短軸方向4.55



第27図 第22号住居跡

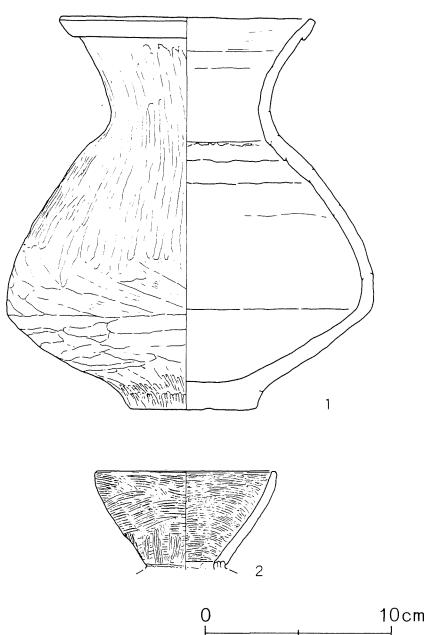
m、深さ30cmである。炉は検出されなかった。ピットは3基検出されたが、柱穴と考えられるものはない。

南西コーナーからほぼ完形の壺が出土した。

第22号住居跡出土遺物（第28図）

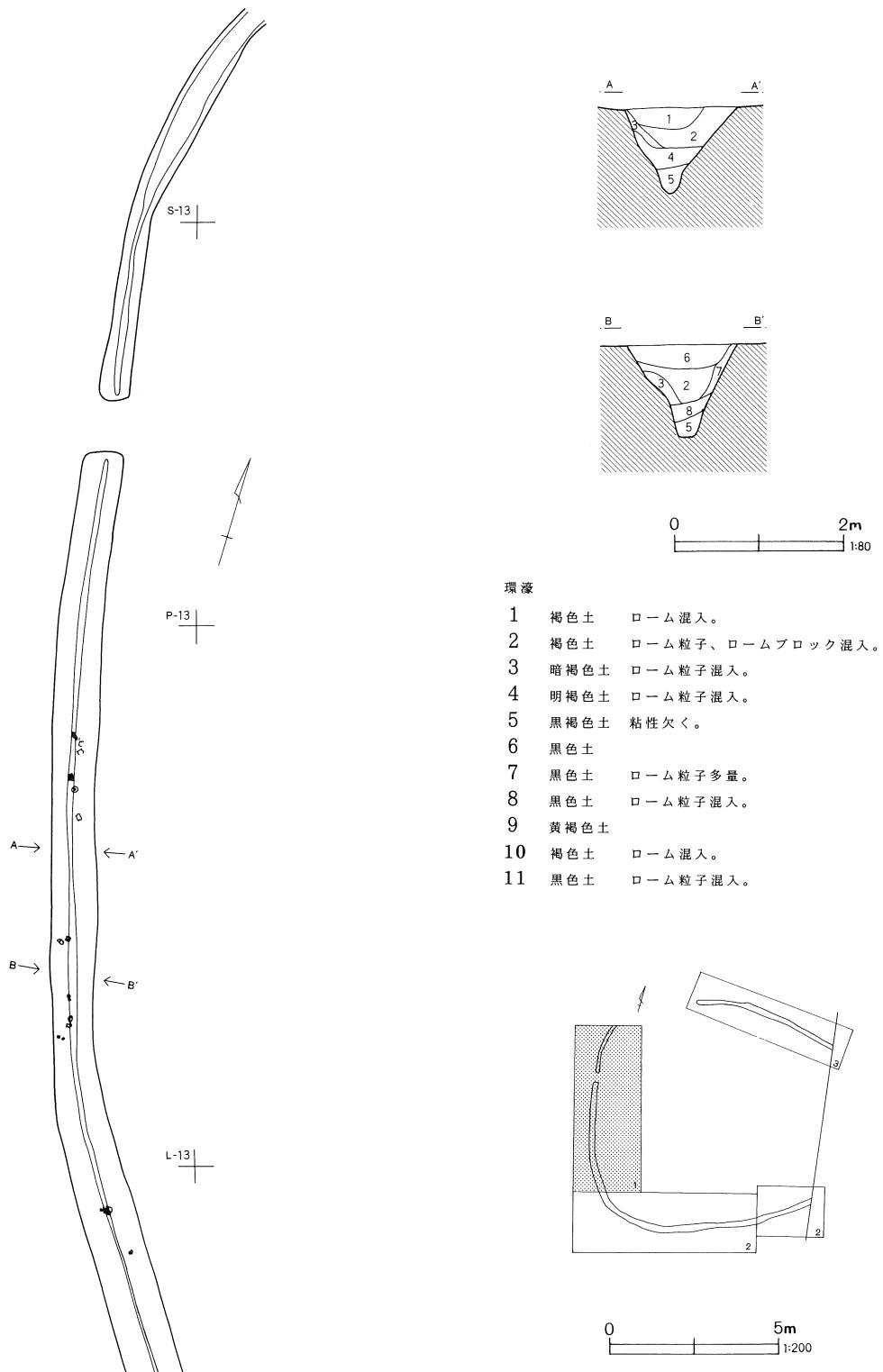
1の壺は胴部下半が算盤玉状に大きく張り、口縁部は折り返し状口縁で、端部には平坦面が作出される。胎土中に2mm内外の赤褐色、黄褐色粒子を多量に含有する。

2の壺口縁部は緩やかに内彎し端部は丸く収まる。内外面赤彩される。

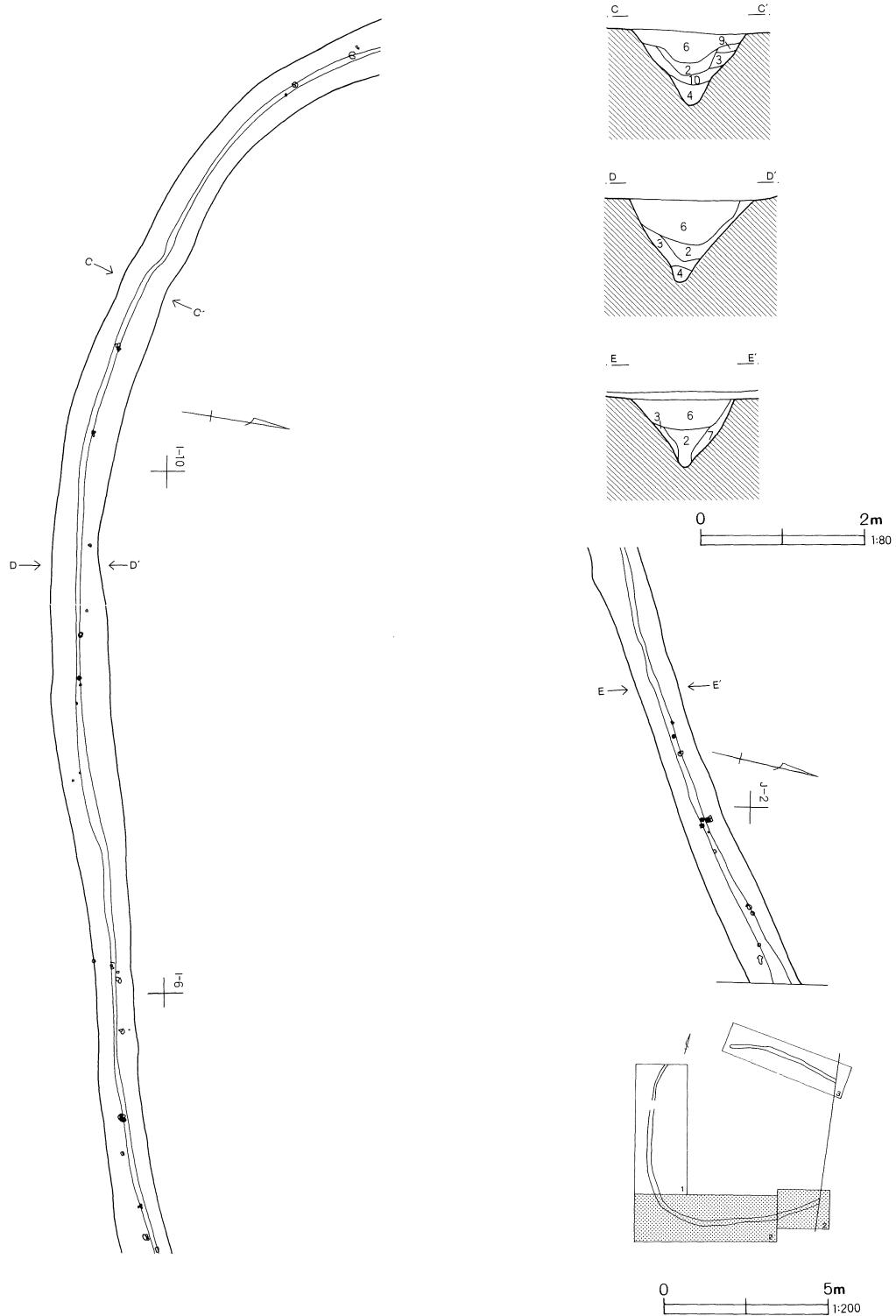


第28図 第22号住居跡出土遺物

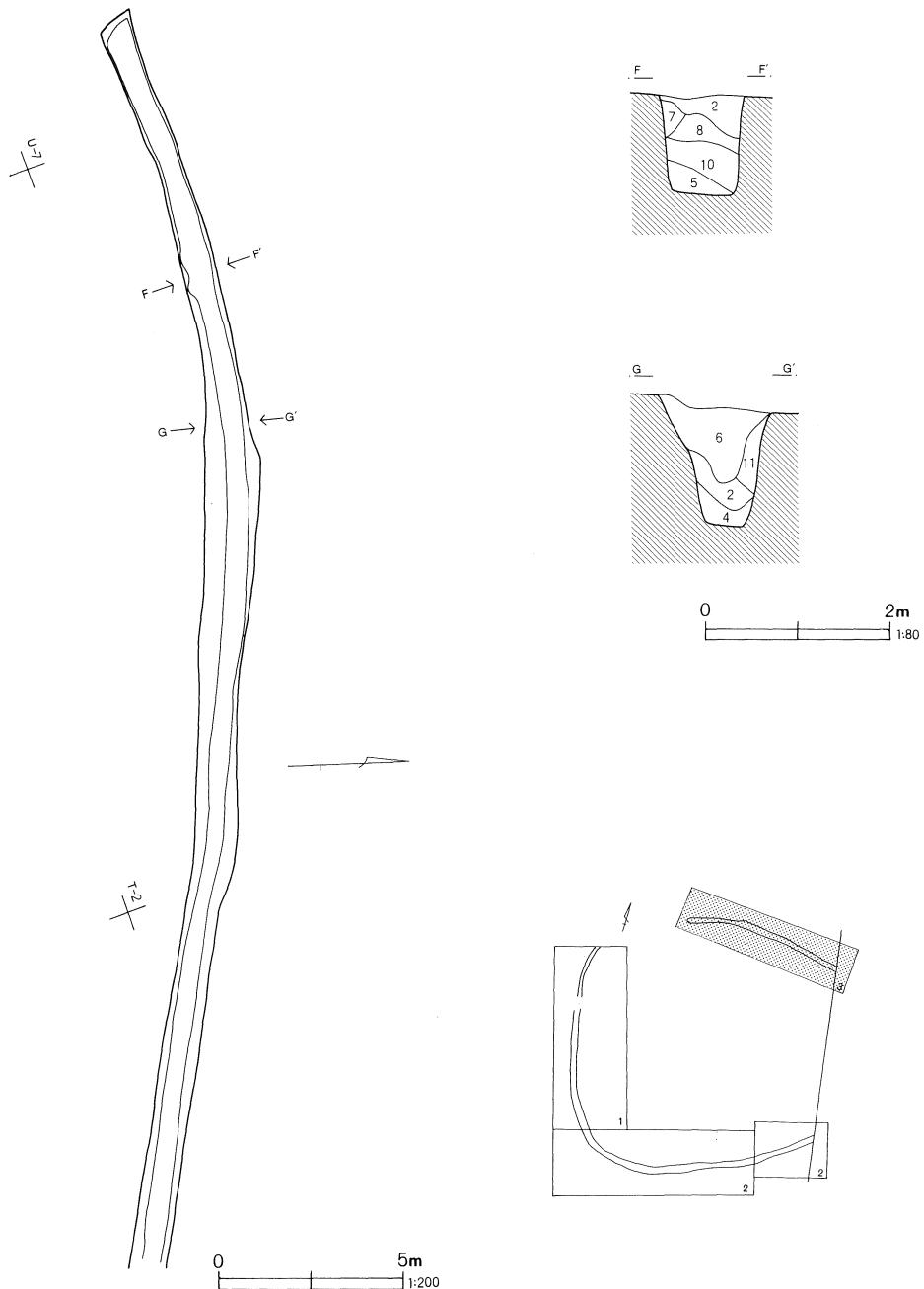
(2) 環濠 (第29~37図)



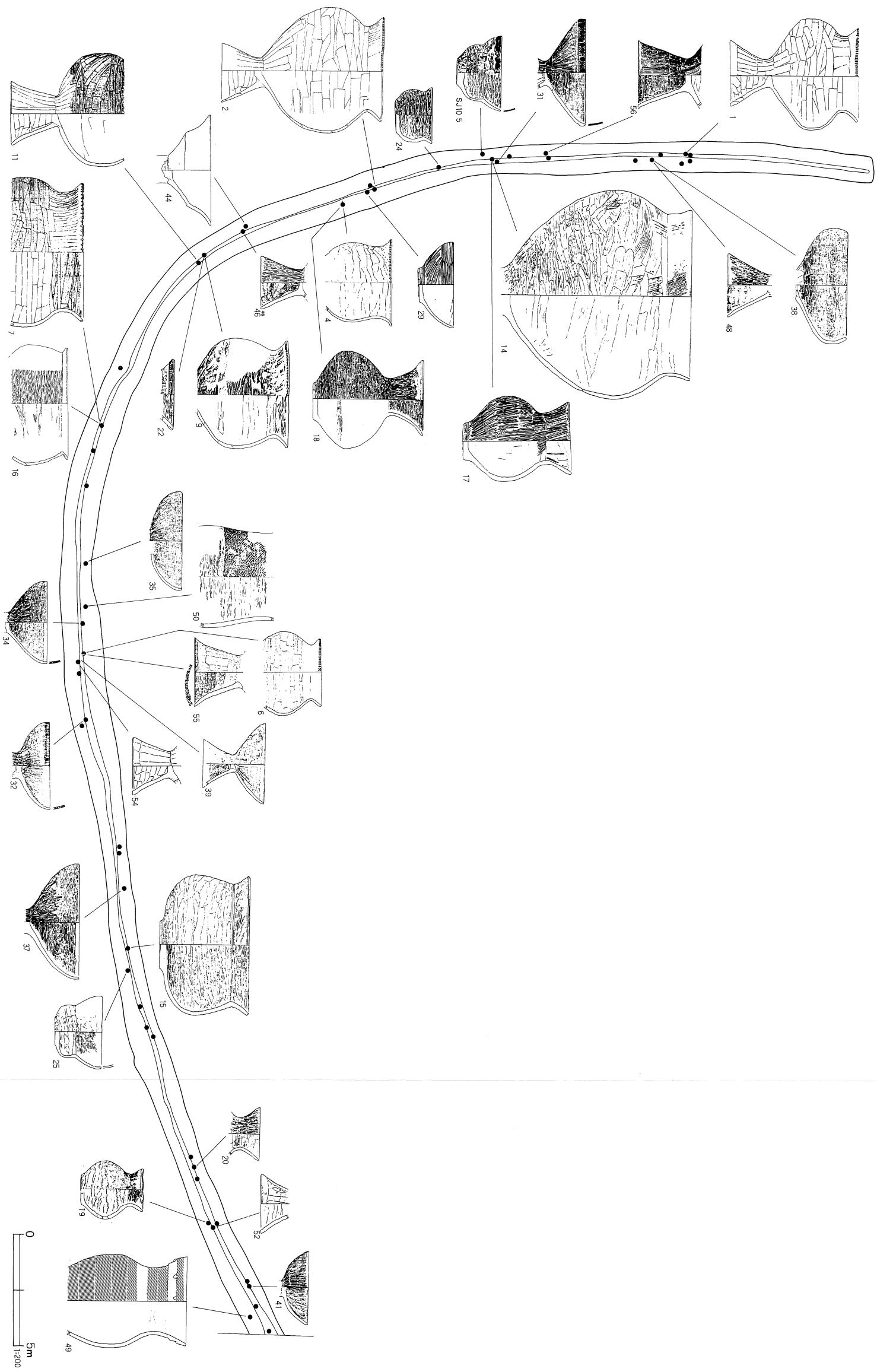
第29図 環濠(1)



第30図 環壕(2)



第31図 環壇(3)



第32図 環濠遺物出土状況図



1条検出されている。3で述べたように岩槻市遺跡調査会の調査により、調査区の東側でも連続することが確認されている。全体の平面形は東側にやや長い不整円形である。全長は調査区内で118mである。環濠内の面積は調査区内で2,420m²である。北西部に2箇所開口部を持ち、12軒の住居跡が環濠内にある。

第29～31図には、環濠を3分して示した。北溝（第29図）はR～V—1～7グリッドに位置する。確認面の幅は1.0～1.5m、深さは1.0～1.4mである。断面形は箱形、もしくは箱薬研である。

西溝（第30図）はJ～T—12～14グリッドに位置する。確認面の幅は0.7～1.4m、深さは1.0～1.2mである。断面形はV字形である。

南溝（第31図）はH～J—1～13グリッドに位置する。確認面の幅は1.1～1.8m、深さは1.0m前後である。断面形はV字形である。

環濠全体では幅が1.2前後、深さ1m前後でほぼ一定しているが、北溝は1.4mとやや深い。断面形も北溝のみ異なる。

覆土は自然堆積で、埋め戻された状態は認められない。環濠内からの流れ込みである2・8層はロームブロックを多く含み、環濠内に盛り土があった可能性がある。

遺物はまとまって6層を中心とする上層から出土した。

環濠出土遺物（第33～37図）

多量の遺物が出土している。環濠内外の住居跡出土遺物とほぼ同様の様相を示し、時期的にも差がないと考えられる。

以下、器種毎に概観する。

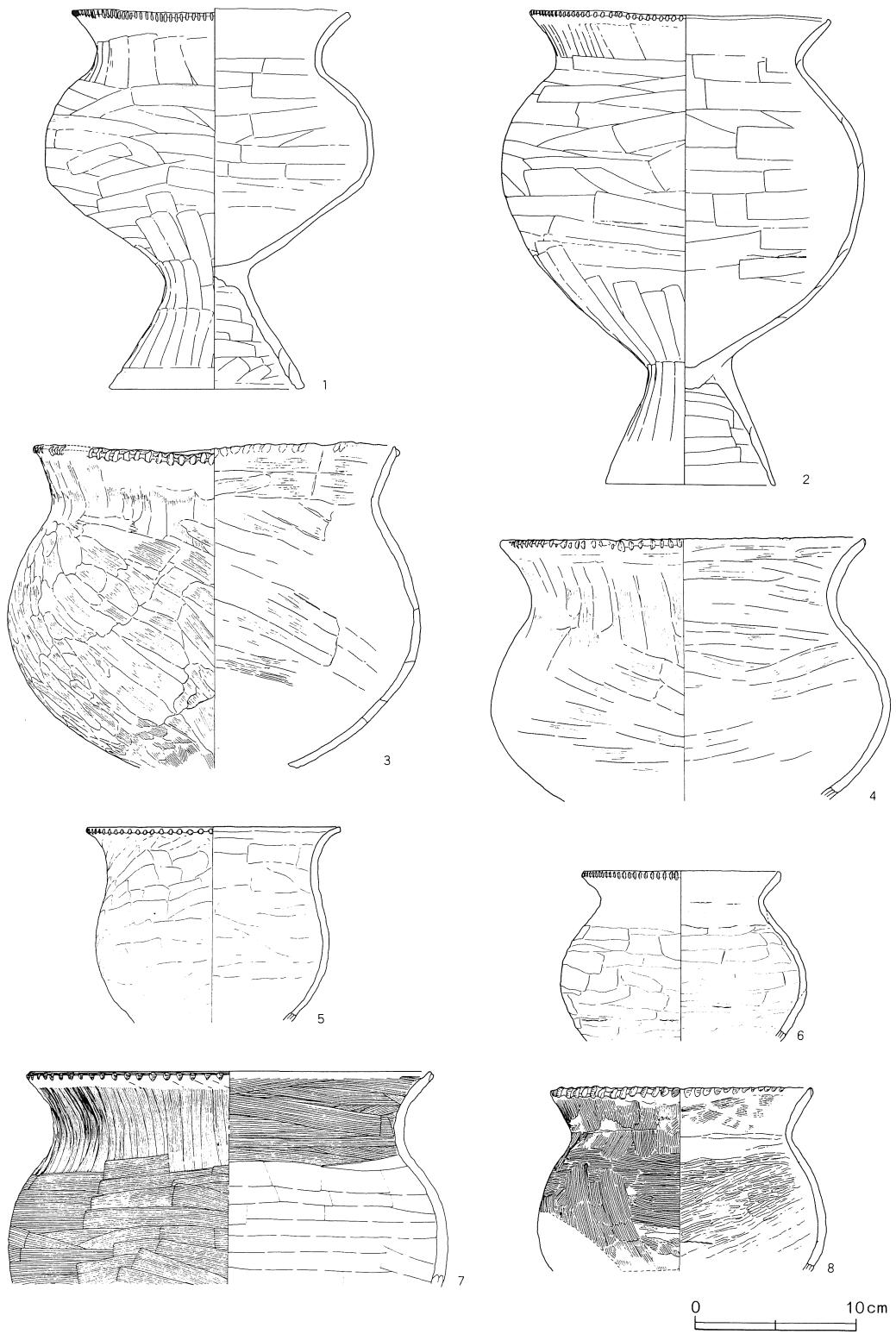
甕 台付甕と平底甕がある。1～9・11～14は台付甕である。1・5以外は口縁部が「く」の字に屈曲するものである。1・5は緩やかに屈曲する。口縁端面は平坦に仕上げられ面を持つ。12は面を持たない。12以外の下端には刷毛目工具による浅い刻み目が施される。胴部は4段階の工程により成形される。脚台部との接合は、胴部成形後に倒立させて貼り付けたもの（1・2・13）と、脚台から胴部を積み上げたものがある。外面の調整は、口縁部一縦→胴部一横→脚台一縦の3単位で行われている。

外面の調整は1～6・14がヘラナデ、3・7・8・9・12・13がハケメ、11がヘラナデ後ハケメである。内面は木口状工具によるナデがほとんどである。7・9・12はハケメ後木口状工具によるナデ、8は上位がヘラ磨きである。

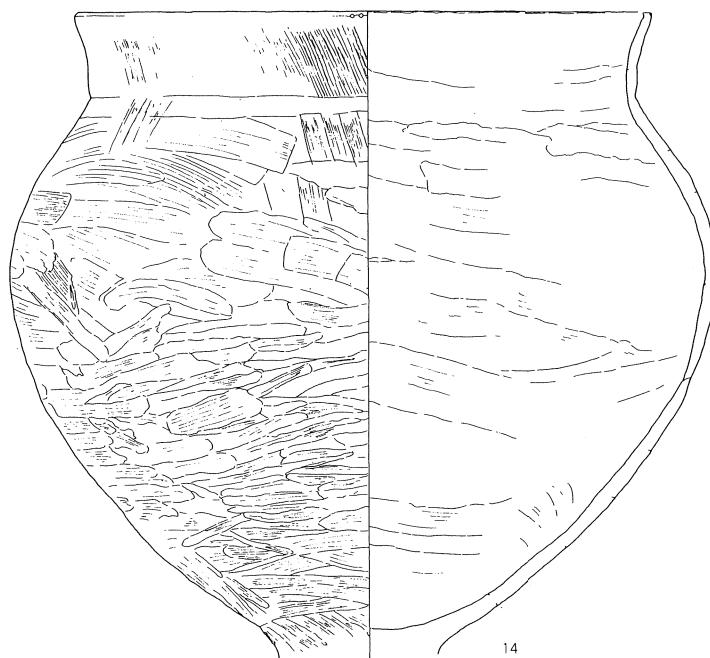
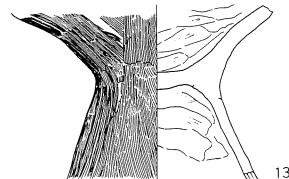
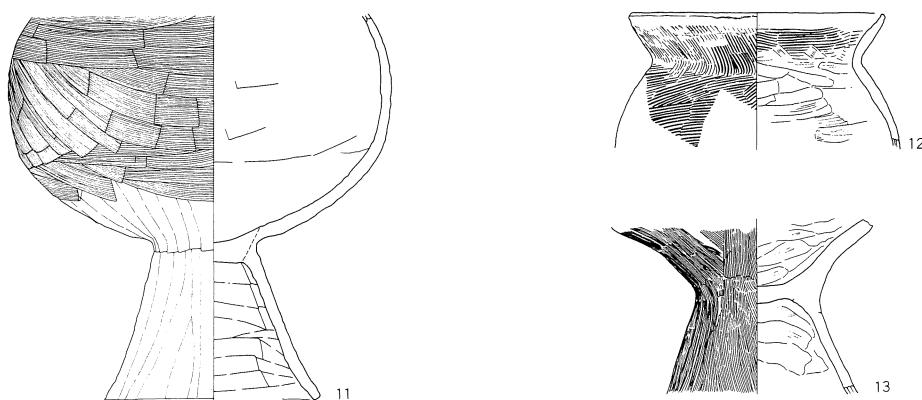
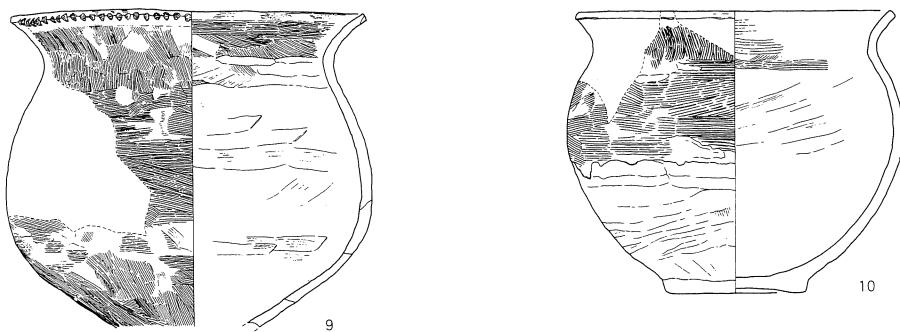
10は平底甕である。唯一のもので台付甕とは様相が異なり、どちらかといえば壺のような印象を受ける。頸部は「く」の字に屈曲し、端部は面を持つ。調整は台付甕と同様である。

大型鉢 15・16は大型鉢である。口縁部は短く、頸部は段をもって屈曲する。胴部は下膨れで底部は大きい。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキである。端部は木口状工具により端面が作出されるが僅かに凹状を呈する。16の外面は丁寧にヘラミガキが施される。

壺 17・20は単純口縁の壺である。法量に大小がある。17・19は口縁が短く、18・20はやや長い。18は外反する。口縁端部は18が面を持ち、端面に単節RLの細繩文が施文される。20は平坦面が作出され、17・19は丸く収められる。胴部は4段階の工程により成形される。17は外面に、20は内面に、

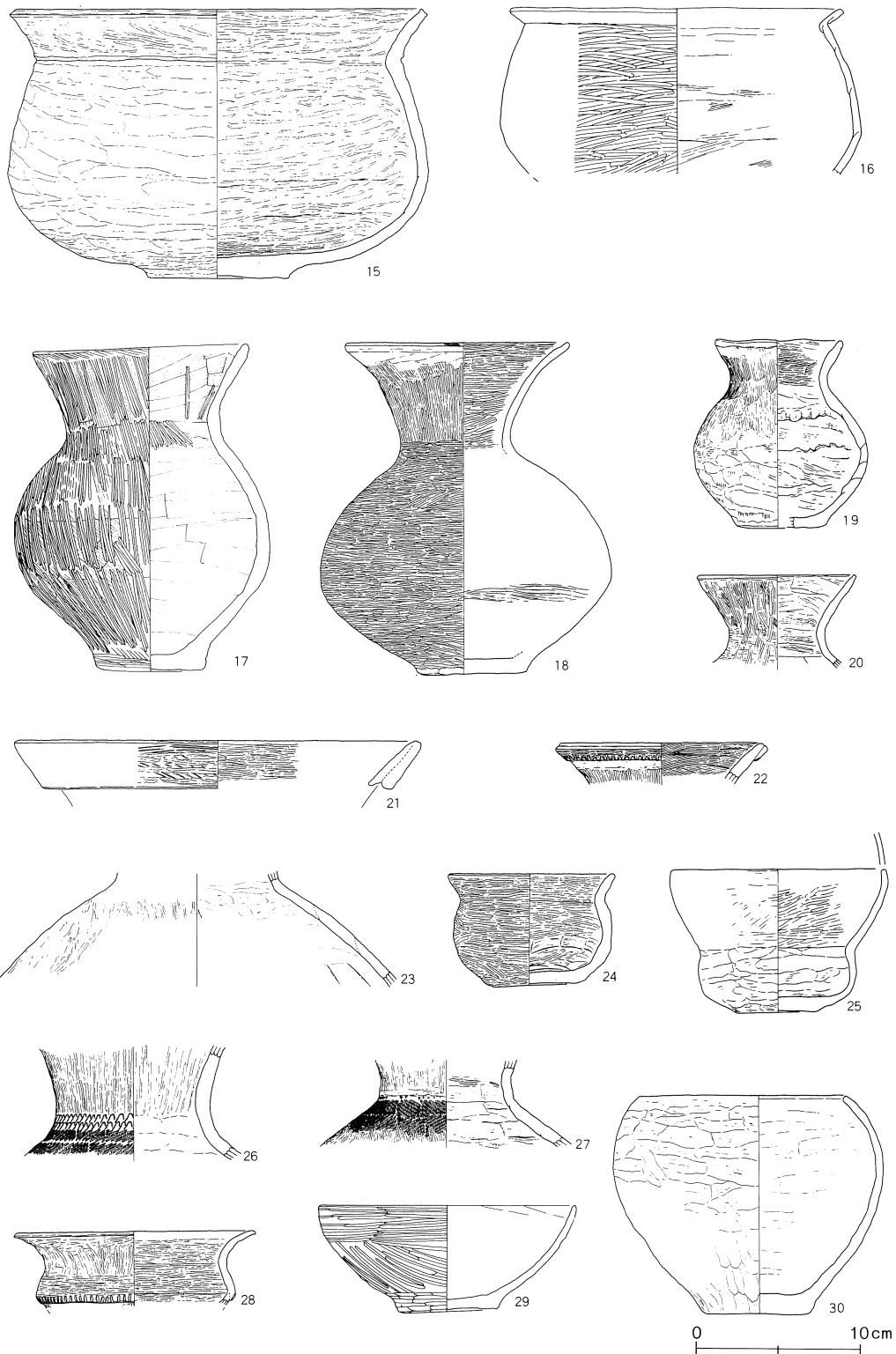


第33図 環濠出土遺物(1)

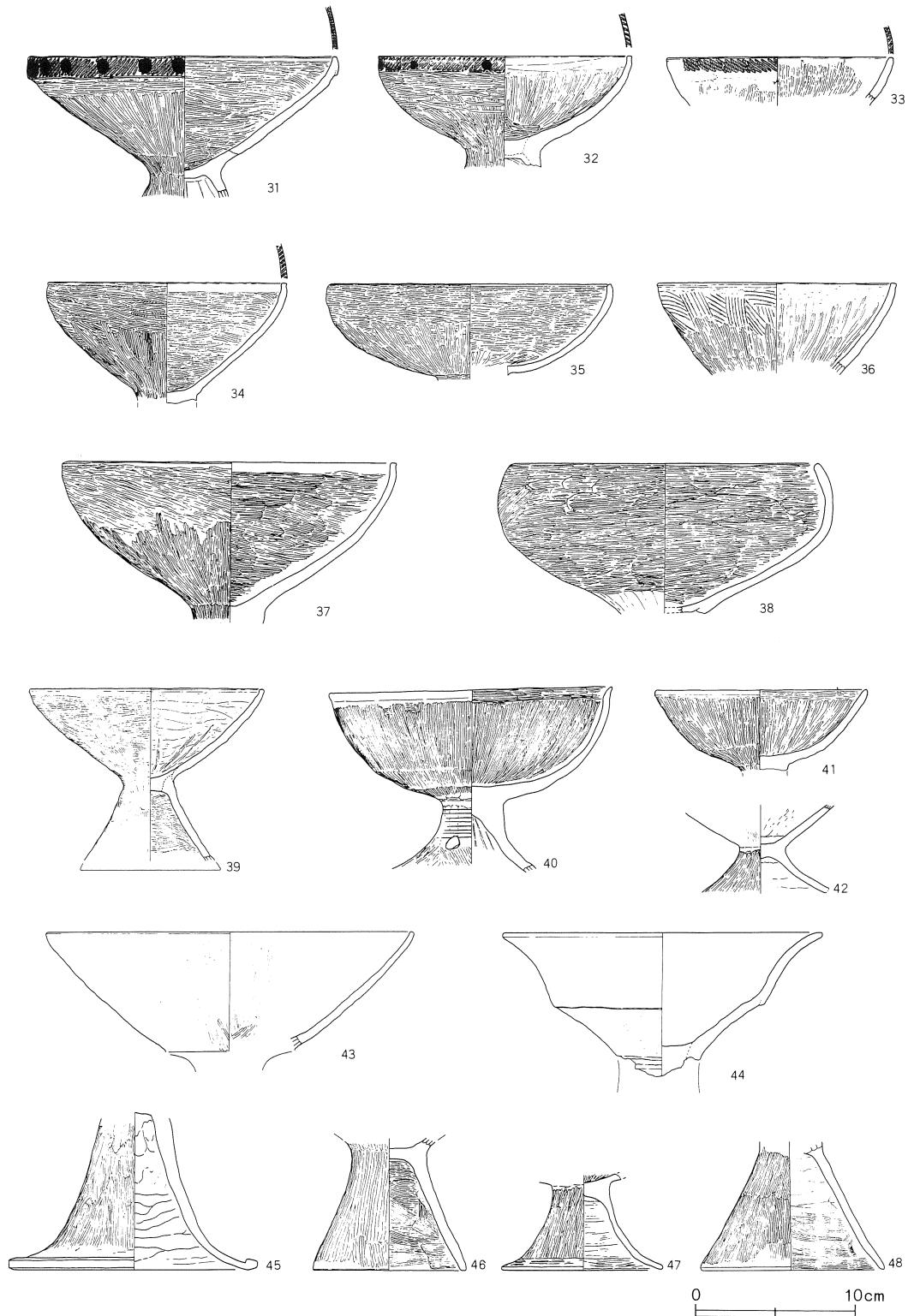


0 10 cm

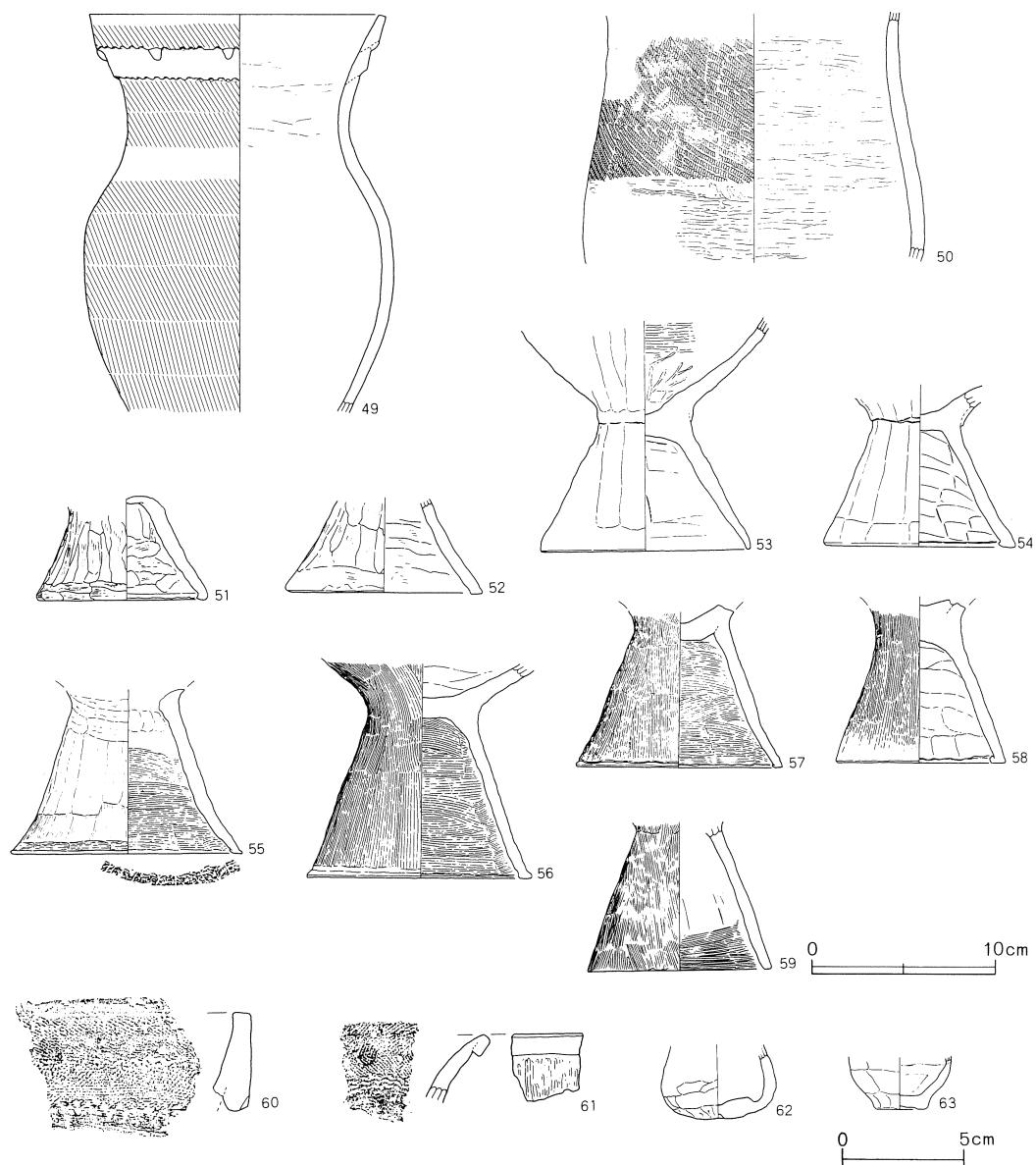
第34図 環濠出土遺物(2)



第35図 環濠出土遺物(3)



第36図 環濠出土遺物(4)



第37図 環濠出土遺物(5)

粘土の積み上げ痕が明瞭に認められる。形態、頸部の屈曲はまちまちである。底部は大きめで、突出する。外面の調整は、17・18・20の口縁部がハケメ後ヘラ磨き、19がハケメ、胴部は17・20がハケメ後縦位のヘラ磨き、18は横位のヘラ磨き、19はハケメ後ヘラナデである。内面の調整は、17・20が木口状工具によるナデで、17は不明瞭だが更にヘラ磨きが加えられる。18・20はヘラナデで口縁部には横位の細かいヘラ磨きが加えられる。

21・22は複合口縁の壺である。21は大型で、22は小型である。いずれも端部外面に粘土を貼付す

るものである。21は外面ハケメ後横位の粗いヘラ磨き、内面は横位のヘラ磨きである。22は複合部外面が横位のハケメ後下端にハケメ工具による押捺、口縁全体は縦位のヘラ磨きである。

23・26・27は頸部と肩部の破片である。23の外面は縦位のヘラ磨き後、頸部に横ナデが加えられている。26・27は頸部直下に縄文が施文されるものである。調整・施文は口縁部→胴部の順で行われる。26は縦位のヘラ磨き後、S字状結節文、単節 LR の順で行われる。27は縦位のヘラ磨き後、単節 RL、LR、縦位のヘラ磨きの順で行われる。

鉢 24・25・28～30は小型の鉢である。24・25・28は頸部があるので、各々がまったく異なる形態である。24は短い「く」の字状口縁のもので、端部が丸く収められる。胴部には3段階の工程が認められる。底部がやや大きい。内外面とも細かい横位のヘラ磨きが施される。内面の底部周辺には木口状工具によるナデが認められる。底面は粗いナデである。25は口縁が長く緩やかに内彎するものである。端部は面取りされる。頸部は明瞭な稜が付く部分がある。口縁部は外面が粗いヘラ磨き、内面がやや雑なヘラ磨きである。胴部の内外面は木口状工具によるナデである。底面はナデである。28は大きく外反するもので、端部は外側にわずかに折り返し状になっている。胴部の中位に段がつけられ、浅い押捺が見られる。内外面とも横位のヘラ磨きである。29は塊形のものである。底部が突出する。外面は木口状工具によるナデ後横位、斜位のヘラ磨きが施される。内面は光沢がありヘラ磨きの可能性もあるが、単位が認識できない。30は大きく内彎するものである。内外面とも木口ナデである。

高坏 坏部が塊形のもの、直線的なもの、大きく外反するもの等多様な形態がある。31～33は口縁部に縄文施文されるものである。31・32が単節の LR、33が単節の RL である。いずれも同一施文具で端部も施文される。31、32には円形朱文が施される。34は端部のみ縄文施文される。35は偏平な器形である。40は塊状の坏部と大きく開く脚部からなる。坏部は鈍い稜を有し、口縁上位で小さく外反し、内面に稜が形成される。外面は細密な縦位ヘラミガキ、内面は端面が横位ヘラミガキ、以下縦位ヘラミガキである。脚部上位には横位の暗文風の沈線が施される。44は坏部中位で明瞭な段を形成し、上位で大きく外反する。器面状態が悪く不明瞭であるが、内外面とも赤彩痕が残る。脚部に挿入される「へそ」が遺存している。他の高坏と比較すると器壁は厚い。

脚部は大きく開くもの（40・42・45・47）と、直線的なもの（39・46・48）がある。45は折り返し状の裾端部を有する。折り返し部は精緻に成形されており端面を有する。外面は縦位ヘラミガキ、内面はヘラナデである。

上稻吉式の甕 49は上稻吉式と考えられる甕である。今回の整理に当たり実物の所在が不明であったため、1984年時の実測図を掲載した。実測図には単節の縄文が描かれていたが、上稻吉式の縄文は附加条であることから施文原体と異なる縄文が描かれている懸念があり、ここでは施文単位のみをスクリーントーンで示した。発見され次第何らかの形で報告したいと考えている。

吉ヶ谷式の甕 50は吉ヶ谷式の甕である。上位に単節 RL の縄文が施文される。それ以外の部分は内外面とも横位のヘラ磨きである。

台付甕脚台部 51～59は台付甕の脚台部である。53以外はいずれも端部が面取りされる。外面の調整は51～54がヘラナデ、56～59がハケメ、55がハケメ後ヘラナデである。53の胴部内面にはヘラ磨

きが施される。

壺 60・61は壺の口縁端部である。60は横位のハケメ後単節 RL → S字状結節→単節 LR の順で施文され、複合部下端にハケメ工具による刻みが施される。円形朱文が1単位認められる。61は内面に単節 LR → 単節 LR → S字状結節の順で施文される。円形朱文が1単位認められる。

ミニチュア 62・63はミニチュアの土器である。62は内外面とも雑なナデが施される。63は内外面ともヘラナデで、底部は無調整である。

(3) その他の出土遺物

出土遺構が不明なものの中主要なものを報告する。

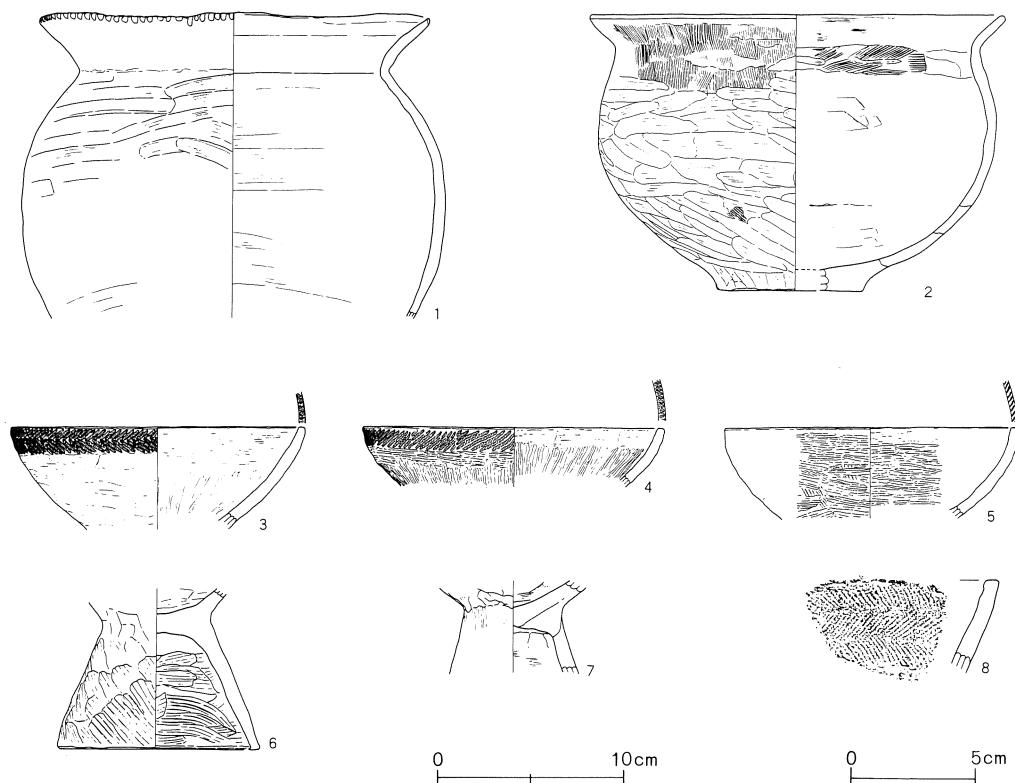
1は台付甕である。頸部が「く」の字状に屈曲する。端部は断面が丸い工具で刻み目が施される。口縁部は横ナデ、胴部は横位のヘラナデである。

2は大型の鉢である。頸部が「く」の字状に屈曲する。口縁端部は面取りされる。調整は斜方向のハケメ後横位のヘラナデである。内面は特に平滑に仕上げられている。

3～5は高坏の坏部である。3・4は縄文施文のものである。3は単節 RL → 単節 LR → 横位のヘラ磨きの順で施文される。4は単節の LR である。端面にも同様の縄文が施文される。5は端面のみに単節 RL が施文される。

6・7は台付甕の脚台部である。7は接合痕が顯著に残る。

8は高坏の口縁部である。外面に単節 LR → 単節 RL → 単節 LR の順で施文される。



第38図 その他の出土遺物

木曾良遺跡遺物法量表

番号	器種	口径	器高	底径	残存率	備考
第5号住居跡						
1	高 坏			7.8	100%	外面赤彩。
2	壺					
第6号住居跡						
1	鉢	10.2			15%	内外赤彩。輪積み痕顯著。ミニチュア的。粗製。
2	壺				30%	内外面施文域以外赤彩。繩文施文は雑。焼成良好。
3	壺					櫛歯状工具押圧によるキザミ。施文域以外内外赤彩。
第7号住居跡						
1	台付甕	21.6			80%	口縁3段の輪積み痕。胴部上半煤付着。
2	台付甕	22.2			70%	
3	高 坏	13.8			15%	内外面赤彩。
4	壺			7	25%	底面ヘラナデ。
5	壺					羽状繩文。円形朱文。
第8号住居跡						
1	甕	24.2			60%	端部面取り後刻み。胴部下半被熱劣化顯著。
第10号住居跡						
1	壺					
2	壺				80%	二次被熱顯著。
3	壺					
4	壺				80%	内外面赤彩。
4	台付甕			12.2	40%	脚裾緩い反り返り。端部押し潰されて平坦面。
5	高 坏			10.6	40%	外面赤彩。端部平坦。
6	高 坏				30%	坏部稜はやや鈍い。剥離顯著。推定口径20cm。
7	高 坏	17.6			20%	内外端面赤彩。
8	鉢	9.5	4.5	4.2	70%	全体に雑なつくり。
9	壺					
10	壺					
11	台付甕				70%	
12	台付甕			13.8	90%	端部荒いヘラナデによる面取り。
13	壺	17.2			20%	内外赤彩。
14	台付甕			11.5	70%	
15	高 坏					
16	壺					棒状浮文推定3本1単位。内面赤彩。焼成良好。
17	勾 玉					長さ3.9 幅1.5 孔径0.4。完形。
18	台付甕					
19	高 坏					外面坏部・内面赤彩。
第11号住居跡						
1	壺	15.8			40%	内面赤彩（外面確認できず）。焼成良好。ヤヤ脆弱。
2	壺	10.4			60%	外面赤彩。内面頸部付近まで赤彩。焼成優。
3	壺			6	40%	焼成優。
第12号住居跡						
1	鉢	32.8		9.8	20%	端面・内面赤彩。

第14号住居跡						
1	台付甕	17.5			90%	
第18号住居跡						
1	壺	11.8			20%	胴部外面煤付着。
第19号住居跡						
1	壺			9.2	40%	
第20号住居跡						
1	台付甕	19.8			70%	赤色粒子多量。
2	甕	21.0			70%	
3	壺			10.4	50%	
4	壺			8.7	40%	外面赤彩。
5	鉢	12.0		5	90%	内外面赤彩。焼成良好。
6	壺					縄文施文。沈線区画。
第22号住居跡						
1	壺	13.8	21	6.8	70%	底部径方向ナデ。焼成良好。やや脆弱。
2	壺					
環濠（第1号溝）						
1	台付甕	17.2	23.2	12.0		
2	台付甕	18.6		10.4	80%	
3	台付甕	22.8	25.5		80%	端部折り返して肥厚。外面黒化。
4	甕	22.5			80%	
5	甕	15.7			40%	
6	甕	12.4			45%	
7	甕	25.2			25%	端部横ハケ。
8	甕	16.2			30%	
9	台付甕	19.2			40%	ハケメ状工具によるキザミ。
10	甕	17.2	15.0	7.5	45%	
11	台付甕			11.6	40%	外面煤付着。
12	甕	13.8			20%	
13	台付甕				60%	
14	甕	30.8			40%	口縁部キザミ。肩部煤付着。
15	鉢	25.3	16.2	8.5	70%	内外面赤彩。内面ヘラミガキ。
16	鉢	20.0			30%	
17	壺	13.0	18.8	6.7	80%	
18	壺	13.6	20.0	7.0	80%	外面・頸部内面赤彩。
19	壺	7.8	11.3	5.5	60%	外面・頸部内面赤彩。
20	壺	9.6			70%	器面摩耗し赤彩不明。
21	壺	24.8			15%	内外面赤彩。
22	壺	13.0			25%	外面赤彩。
23	壺				40%	外面赤彩。
24	壺	10.2	6.7	5.0	85%	内外面赤彩。
25	壺	13.2	8.6	4.9	40%	胴部中位～口縁外面・口縁内面・端部赤彩。
26	壺				60%	施文域外外面・頸部内面赤彩。
27	壺				70%	施文域外外面赤彩。
28	鉢	14.6			25%	内外面赤彩。

29	鉢	15.5	5.9	6.5	90%	
30	鉢	14.6	4.5	6.6	70%	外面赤彩。擬口縁。
31	高 坏	19.6			60%	円形朱文。施文域以外赤彩。
32	高 坏	15.8			70%	円形朱文。施文域以外赤彩。
33	高 坏	14.4			15%	施文域以外赤彩。
34	高 坏	15.0			75%	内外面赤彩。端面繩文施文。
35	高 坏	17.6			80%	内外面赤彩。
36	高 坏	14.8			40%	
37	高 坏	20.9			70%	内外面赤彩。端面外傾し面取り。
38	高 坏	19.2			85%	内外面赤彩。
39	高 坏	14.6			90%	外面ヘラナデ。
40	高 坏	17.6			80%	脚部上位浅い沈線横走。
41	高 坏	13.2			90%	
42	高 坏				70%	外面・坏部内面赤彩。
43	高 坏	23.0			50%	
44	高 坏	20.0			70%	内外面剥離顯著(外面二次被熱)。内外赤彩。
45	高 坏		15.4	80%		端部ヨコナデにより平坦。
46	高 坏		9.6	100%		外面赤彩。
47	高 坏		10.1	95%		坏内面・脚外面赤彩。
48	高 坏		11.5	95%		外面赤彩。
49	甕					実物所在不明。上稻吉式甕。
50	甕				35%	吉ヶ谷式甕。
51	台付甕				100%	
52	台付甕		10.7	100%		二次被熱顯著。
53	台付甕		10.8	50%		
54	台付甕		10.4	100%		
55	台付甕		12.8	100%		底面葉脈痕。
56	台付甕		12.2	60%		
57	台付甕		11.2	50%		
58	台付甕		9.2	100%		煤付着。
59	台付甕		10.0	90%		
60	壺					円形朱文。内面赤彩。
61	壺					円形朱文。施文域外外面赤彩。
62	ミニチュア				40%	
63	ミニチュア		3.0	60%		
54	台付甕		10.4	100%		
不 明						
1	台付甕	20.8			20%	
2	鉢	22.2	14.7	7.9	50%	外面底部外周より上位赤彩。内面胴部中位より上位赤彩。
3	高 坏	15.8			30%	繩文施文。施文部以外赤彩。
4	高 坏	15.8			25%	繩文施文。施文部以外赤彩。
5	高 坏	15.6			20%	内外面赤彩。端部繩文施文。
6	台付甕		10.8	95%		
7	台付甕				40%	
8	高 坏				5 %	外面繩文施文。

5. まとめ

(1) 埼玉県内の環濠集落

現在、埼玉県内の環濠集落に関する報告例は、29ヵ所が知られている。ここでは、その成果を集めて今後進めるべき研究の糧として収録したものである。なお、出典については、網羅する意味で年報の類も含めたため、詳細な情報が欠落した遺跡を多々含んでいることを明記しておく。

- 1 神明ヶ谷戸遺跡（しんめいがやと） 所在地 児玉郡美里町中里525
立 地 上武山地北端の松久丘陵を構成する南北150m、東西140mの独立丘陵上に立地。沖積地との比高差15.0mを測る。
時 期 弥生時代中期後半（栗林式期） 平面形 長楕円形
規 模 東西55.0m、南北80.0m
濠形態 上面覆1.0m～2.2m、深さ0.5～1.5m、断面「箱矢研堀」形。調査は総延長80.0m。
集 落 環濠の営まれた段階の住居跡は3軒程で、弥生後期～古墳時代後期など総数13軒を数える。
施 設 土抗4基の他、特に認められない。
文 献 坂本和俊他「神明ヶ谷戸遺跡の調査」『第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 1980
- 2 池上・池上西遺跡（いけがみ・いけがみにし） 所在地 熊谷市大字上之字東覚4079
立 地 荒川と利根川に挟まれた沖積低地に立地。遺跡の内容は、池守、池上遺跡更に行田市小敷田遺跡を包括したものである。標高は池守遺跡で20～21m、池上遺跡で22mを測る。小敷田遺跡では、環濠と同時期の方形周溝墓が3基検出された。
時 期 弥生時代中期前半（須和田式期） 3本の環濠と集落は、ほぼ同時存在と考えられている。
平面形 2条の環濠が検出されたが、二重の環濠となるか否かは不明。1号環濠はN-32°-Wで直線的に延び、2号環濠はほぼ南北方向に伸び、南で若干東に振れる。3号環濠はN-68°-Eをさし、1・2号環濠と交錯する位置関係をもつが、灌漑用の水路という見方もある。調査区が限定されるため形状を想定することは困難。
規 模 1号環濠の総延長は65m、2号環濠は総延長113mを測る（事業団調査分を含む）。3号環濠は、総延長24mを測る。
濠形態 1号環濠の上面幅2.65～4.20m、底面幅0.65～1.20m、深さ1.05～1.30mで、断面「略逆台」形をなす。2号環濠は上面幅2.00～2.46m、底面幅0.25～0.30m、深さ1.00～1.25mで、断面「V」字形をなす。1・2号環濠とも覆土は同質。3号環濠は、上面幅2.6m、底面覆0.36～0.64m、深さ1.13mで、断面「逆台」形をなす。覆土は1・2号環濠と大きく異なる。
集 落 環濠内から11軒検出されたが、東側を内とした場合、1号環濠内に距離をもって2軒、2号環濠内に9軒の分布が認められる。果して2つのグループとするか否かは不明。
施 設 特になし。
文 献 中島 宏他「池守・池上」一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書 1984
宮 昌之他「池上西」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集 1983
- 3 円山遺跡（まるやま） 所在地 大里郡大里村大字箕輪字円山63
立 地 荒川と和田吉野川が形成した広大な沖積地を臨む比企丘陵末端部の舌状台地上に立地。沖積地からの比高は17.0mを測る。（調査面積3,000m²）
時 期 弥生時代中期中葉（宮ノ台式期）機内系土器が共伴
平面形 不明 規 模 調査区が限られ不明。
濠形態 上面幅3.0m、深さ1.0～1.5m、断面「V」字形をなす。
集 落 弥生時代中期の住居跡3軒、土抗4基他、後期の周溝墓2基が検出された。全体像は不明。周溝墓内からは、吉ケ谷式と岩鼻式が共伴するが、後期は外来系が主流をなす。
施 設 特になし。
文 献 若松良一「大里村円山遺跡の調査」『第19回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会 1986

4 船木遺跡（ふなき） 所在地 大里郡大里村大字箕輪字船木867他
立 地 荒川を臨む比企丘陵北辺部の一支台に位置する。標高35m、水田面との比高差16mを測る。
西方には支谷を挟んで環濠集落の円山遺跡が所在する。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）と中期後半（宮ノ台式期）の2時期が存在する。
平面形 調査面積13,000m²、独立丘の端部を溝で区画し、集落域と墓域に分離した可能性あり。
規 模 詳細不明
濠形態 1号環濠（弥生後期）上面幅1.4m、深さ1.0m、断面「V」字形。
2号環濠（弥生中期）上面幅2.6m、深さ0.7mを測る。
集 落 弥生時代中期後半の住居跡3軒、方形周溝墓2基、弥生時代後期の住居跡2軒、方形周溝墓9基、礫床墓1基が検出され明確な2時期が存在。
施 設 墓域と集落を分離する意味での溝。
文 献 出繩康行「大里村船木遺跡の調査」『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
1992

5 天神原遺跡（てんじんばら） 所在地 東松山市大字古凍字天神原1055-2
立 地
時 期 弥生時代後期後半 平面形 調査区が限られるため詳細不明
規 模 詳細不明 濠形態 断面「V」字形、他は詳細不明
集 落 住居跡1軒 施 設 詳細不明
文 献 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報」平成6年度 1996

6 楽上遺跡（らくじょう） 所在地 桶川市大字川田谷字楽上耕地1006
立 地 荒川の支流である江川に東面する川田谷支台上に位置し、標高12.0～17.0m、江川侵食谷との比高差は6.0を測る。
時 期 弥生時代終末（古墳時代初頭） 平面形 トレンチ調査のため詳細不明。
規 模 詳細不明（集落の外縁部を巡ると思われる）
濠形態 底面幅1.0～2.0m、深さ1.0mを測る。
集 落 住居跡8軒。環濠集落としては疑問視されている。
施 設 特になし。
文 献 桶川市教育委員会「砂ヶ谷戸1・2遺跡」桶川市文化財調査報告書第9集 1977

7 木曾良遺跡（きぞら） 所在地 岩槻市大字木曾良字屋敷16
立 地 元荒川渓谷の右岸、岩槻支台の北面する舌状台地上に所在。標高11m、沖積地との比高差4mを測る。縄文時代前期の地点貝塚、及び近世の遺構が複合するが、遺存状態は不良。
時 期 弥生時代後期後葉（弥生町式期）環濠内から多量の土器が出土しているが、東海系、中部高地系、関東地方東部系など他地域の土器が多数混入している。
平面形 長軸を東西にとる略楕円形。北西に18mの開口部、東に広く未掘部を残す他は濠により画されるが、ほぼ全容を想定できる。
規 模 東西70m、南北50m、面積はおよそ3,500m²が想定される。
濠形態 北面する濠は断面「U」字形で、上幅1.1m、深さ2.0m、他は断面「矢研」状で、上幅1.0m、深さ1.0mと浅い。
集 落 環濠内からは住居跡14軒が検出されたが、重複関係及び同時存在が不可能な位置関係のものもあり2～3時期が想定される。濠の外側にも8軒が検出されており、先後関係が問題となる。環濠と重複するものはない。
施 設 北西に開口部があり、調査者は広場への出入り口と考えている。
文 献 庄野靖寿他「岩槻市木曾良遺跡の発掘」『第七回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 1974

- 8 深作東部遺跡群（ふかさくとうぶ） 所在地 大宮市大字深作字貝崎634
立 地 綾瀬川を北東に望む台地（大和田片柳支台）上に立地。標高は10～11m、水田面との比高差は2m程を測る。
時 期 弥生時代後期終末（前野町式期）
平面形 傾斜地以外は巡るものと考えられる。長軸を北一東にとる橢円形と考えられる。報告書の1・2号溝が相当し、3号溝については二重の濠を意味するのか枝別れ状であるのか不明。
規 模 総延長45m
濠形態 上面幅0.3～0.7m、深さ0.8m、断面「V」字形をなす。
集 落 住居跡8軒（弥生町式4軒、前野町式4軒）環濠の内外に展開。
施 設 特になし。
文 献 大宮市遺跡調査会「深作東部遺跡群」 1984
- 9 A-61号遺跡（A-61ごう） 所在地 大宮市大字南中野字諏訪18番地他
立 地 綾瀬川と芝川に開析された台地（片柳支台）上に立地する。標高は13.0m、沖積地との比高差は7.0mを測る。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期） 他に古墳時代前期（和泉式期）
平面形・規 模 調査区が限られるため詳細は不明
濠形態 上面幅1.30～1.85m、深さ0.35～0.70m、断面「逆台」形。濠底面の最高位と最低位の差は1.70mを測る。
集 落 住居跡3軒。
施 設 濠の底面及び壁面に多くのピットが穿たれており、調査範囲内で32本が確認された。
文 献 大宮市遺跡調査会「B-92号、A-203号、A-61号遺跡」調査会報告第20集 1987
- 10 A-165号遺跡（A-165ごう） 所在地 大宮市大和田2丁目336番地他
立 地
時 期 弥生時代中期後半（宮ノ台式期）
平面形・規 模 詳細不明 濠形態 詳細不明
集 落 住居跡8軒（一次調査でも検出例があり、かなりの規模の大きな集落の可能性）
施 設 特になし。
文 献 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成8年度」 1998
- 11 染谷遺跡（そめや） 所在地 大宮市大字染谷字金山820他
立 地 大和田片柳支台の南側に位置する。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）
平面形 詳細不明 規 模 詳細不明 濠形態 詳細不明
集 落 少なくとも住居跡5軒、溝状遺構3条調査。
施 設 詳細不明。
文 献 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」 1985
- 12 土屋下遺跡（つちやした） 所在地 大宮市大字土屋字下12-2番地
立 地 荒川と鴨川により形成された自然堤防上に立地。標高は9m。
時 期 弥生後期後半（弥生町式期） 東海地方東部「菊川式土器」が環濠から出土している。環濠（2号溝）が集落に先行して構築。環濠に先行して断面「U」字形の12号溝が造られる。
平面形 長方形（全周しない） 規 模 不明（総延長48m）
濠形態 上面幅1.10～1.70m、深さ1.15m、断面「V」字形。
集 落 住居跡49軒、方形周溝墓1基を検出。何期かに細分され、古段階と思われる9軒が先行。鉄鎌、ガラス玉等の出土品を伴い、遺跡規模も東西300m、南北260mの範囲が見込まれるこ

とから、当該地域の拠点的集落と考えられている。

施設 環濠に先行する溝あり。

文獻 笹森紀巳子他「土屋下遺跡」大宮市遺跡調査会報告第47集 1994

- 13 御藏山中遺跡（みくらやまなか） 所在地 大宮市大字御藏山中1423番地他
立地 芝川により開析された見沼低地を臨む大和田・片柳支台西縁部に位置する。標高16m、低地との比高差は10mを測る。
時期 弥生時代中期後半（宮ノ台式期）
平面形 南側のみ認められ、半円形となり全周しない。その中央は11mの開口部となる。
規模 東西40m強、南北50m強、但し北側が存在することを仮定して。
濠形態 上面幅1.0m、深さ0.15～0.30m、断面「逆台形」。
集落 濠及び想定範囲内に5軒認められ、地形的な制約から他に存在するとは考えられない。
文獻 渡辺正人他「御藏山中遺跡Ⅰ」大宮市遺跡調査会報告第26集 大宮市遺跡調査会 1989

- 14 中里前原遺跡（なかざとまえはら） 所在地 与野市大字中里字前原139
立地 荒川により形成された鴻沼低地を西方に臨む大宮台地の西縁に所在。標高14.0m、比高7.0m。隣接して同時代の環濠集落及び方形周溝墓群が検出された中里前原北遺跡、方形周溝墓が群在する上太寺遺跡が所在する。
時期 弥生時代後期後半（弥生町式期）～古墳時代初頭。環濠の存続時期は弥生時代の枠内と考えられる。
平面形 円形ないしは橢円形（調査範囲内で想定） 規模 不明（総延長40m）
濠形態 同心円状に3本が巡り、外側及び中間の濠が断面「V」字形で、上面幅1.5m、深さ1.3m、内側の濠は、断面箱形1.5m、上面幅0.8m。
集落 環濠の内外で確認され、環濠構築前、構築時、廃棄後に分けられる。部分的な調査のため、規模的には不明であるが、炉の形態が多様で、有角双孔土製品や出土土器から他地域との広範囲な交流が確認されるなど中核的な集落であったことが理解できる。
施設 環濠の内側に柵列と考えられる柱穴列が検出された。
文獻 中里前原遺跡調査会「中里前原遺跡 第一次調査報告書」 1980

- 15 中里前原北遺跡（なかざとまえはらきた） 所在地 与野市大字中里字前原
立地 霧敷川と芝川に挟まれた浦和支台の西縁に立地。標高13.0m、沖積地との比高差は6mを測る。隣接して中里前原遺跡がある。
時期 弥生時代後期後半（弥生町式期） 平面形 長軸を南北にとる長橢円形と考えられる。
規模 総延長24mを調査。詳細は不明。推定で東西80m、南北60mと考えられる。
濠形態 上面幅1.7m、底面幅0.3m、深さ1.2mを測り、断面「V」字形をなす。
集落 住居跡40軒、方形周溝墓4基を調査。環濠内外に分布し先後関係不明。
施設 特になし。
文獻 与野市教育委員会「中里前原北遺跡・上太寺遺跡」文化財調査報告書第13集 1988
西口正純「中里前原北遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第176集 1996

- 16 与野東遺跡（よのひがし） 所在地 与野市本町東五丁目824番地
立地 与野支台上の東側、鴻沼低地を眼下に臨む位置に所在。標高11.7mを測る。
時期 弥生時代後期後半（弥生町式期） 平面形 調査面積744m² 全容は不明
濠形態 上面幅2.10～2.90m、深さ1.5m、断面「V」字形。
集落 住居跡4軒、この他古墳時代後期住居跡11軒調査。
施設 特になし。
文獻 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財年報」昭和62年度 1987

- 17 矢垂遺跡（やだれ） 所在地 与野市鈴谷7丁目494他
立 地 与野支台上の東端に位置し、隣接する同時代の札ノ辻遺跡、小井戸遺跡とは小さな谷を隔てている。標高は、14.0～15.0mを測る。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）
平面形 調査面積2638m²、平成2年度にも調査。調査範囲が限られるため詳細不明。
濠形態 詳細不明
集 落 住居跡7軒（平成2年度埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査分5軒を含む）
施 設 特になし。
文 献 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財年報」平成4年度 1992
- 18 明花向A遺跡（みょうばなむかいA） 所在地 浦和市大谷口字明花2060
立 地 大宮台地の南端部に位置する。標高13.0m、沖積地との比高差8～9mを測る。
時 期 弥生時代中期後半（宮ノ台式期） 平面形 調査区が限られているため詳細不明。
規 模 総延長8.0mを調査。調査範囲が狭小のため計測不能。
濠形態 上面幅2.0m、深さ1.0mを測る。
集 落 環濠集落に伴う中期の墓域及び後期の方形周溝墓群が形成。
施 設 特になし。
文 献 劍持和夫他「明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 1984
- 19 馬場北遺跡（ばんぱきた） 所在地 浦和市大字三室字馬場2865
立 地 大宮台地の一支台である浦和支台北東縁部に位置する。標高は15.0m、沖積低地との比高差は10.0mを測る。北縁の急斜面をなす。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）
平面形 不整半球形、西濠は直線的、東濠は半球状をなす。
規 模 東西70.0m、南北83.5m以上（未掘区を残すため計測不能）
濠形態 上面幅0.75～2.0m、深さ1.3m、顔面形態は明瞭な「V」字形をなす。
集 落 環濠で区画された集落と環濠の東9.0mに環濠を伴わない集落が存在。時期差は不明だが全体では2時期ある。環濠との重複関係は5軒あり。
施 設 南東部に8.0m、西濠の北寄りに3.0mの開口部あり。
文 献 浦和市遺跡調査会「北宿・馬場北遺跡発掘調査報告書」調査会報告書第91集 1988
- 20 北宿遺跡（きたじゅく） 所在地 浦和市大字三室字馬場2934
立 地 大宮台地の一支台である浦和支台の北東部に位置し、標高は15.2m、沖積低地との比高差は10.7mを測る。過去17回調査。遺跡範囲は幅110m、長さ210mの舌状部が相当する。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）
平面形 円形乃至は東西に長軸をとる橢円形と考えられる。
規 模 総延長62m、東西90.0m×南北70.0mが想定される。
濠形態 上面幅1.6m、下場幅0.4m、深さ1.0m、断面「V」字形。
集 落 33軒が調査。2km弱の範囲に同時期の環濠集落馬場北遺跡が所在。
施 設 濠南部の底面で深さ0.35mのピット検出。
文 献 浦和市教育委員会「北宿遺跡発掘調査報告書17次」調査報告書第151集 1992
- 21 井沼方遺跡（いぬまがた） 所在地 浦和市大字井沼方字馬堤356-1
立 地
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期） 平面形・規模・濠形態。詳細不明。
集 落 住居跡3軒調査（他年度の累計は省く） 施設 特になし。

文 献 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成8年度」 1998

- 22 戸田上本村遺跡II（かみとだほんむら） 所在地 戸田市本町3丁目1829-1
立 地 荒川の氾濫により形成された自然堤防上に立地。標高は5m。第一次調査で、古墳時代初頭の方形周溝墓2基、住居跡2軒が検出されている。近接して鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡等の方形周溝墓群が検出されている。
時 期 弥生後期後半（弥生町式期）、集落出土資料が後出。
平面形 不明（ほぼ直線） 規 模 不明（総延長20m）
濠形態 断面形「V」字、溝上面幅1.6～2.2m、下面幅0.2～0.4m、深さ0.88～1.00m、軸偏差は南北軸が、N-45°-W。
集 落 弥生後期後半～古墳時代前期の住居跡13軒が検出。何れも重複関係にある。
施 設 特になし。
文 献 小島清一「上戸田本村遺跡II」戸田市遺跡調査会報告書第6集 1996
- 23 午王山遺跡（ごぼうやま） 所在地 和光市大字新倉字午王山2861-1他
立 地 武蔵野台地の北東部、荒川により侵食分離された独立丘上に所在。標高は24m、沖積低地との比高差18mを測る。
時 期 弥生時代中期後半～後期中葉迄
平面形 長楕円形（二重の環濠が巡る）で、傾斜面にも環濠が巡っていることが確認された。
規 模 東西220m、南北110m（推定）で、県内では最大規模、面積は20,000m²に及ぶ。
濠形態 内側の環濠（1、2号溝）は、上面幅で最大3.20m、底面幅で0.15～0.30m、断面「V」字形、深さ1.4mを測る。外側の環濠（6号溝）は、上面幅1.8m、底面幅の最大0.28m、断面「V」字形。環濠（2号溝）内から銅鉗が出土している。
集 落 環濠（2号溝）の底面から宮ノ台式土器が出土しており、これが環濠の初現を考える重要な要素に、また後期終末には環濠上に住居が構築されており、終焉の時期の指標となる。環濠内外で検出された住居跡は、弥生時代後期～古墳時代初頭までの49軒、方形周溝墓3基を調査。
施 設 二重濠の存在、テラス。
文 献 鈴木一郎「午王山遺跡（第3次・第4次）」和光市教育委員会 1994
- 24 花ノ木遺跡（はなのき） 所在地 和光市新倉二丁目
立 地 荒川低地を北に見下ろす武蔵野台地の東縁に位置する。遺跡の南西を谷中川が流れ遺跡周辺で越戸川と合流する。低地との比高差は20mを測る。隣接する上之郷遺跡は本来一体となる可能性が高い。新河岸川下流域には、武蔵野台地最大の環濠集落赤羽台遺跡が所在する。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）東海地方の菊川式系譜の土器が多数混入。
平面形 標高が最も高い位置に設けられている。南北に弧を描くことから北東側に区画された集落の存在が考えられ、南北に長軸をとる楕円形が想定される。
規 模 二重環濠。8～9mの間隔で平行して巡る。1号環濠総延長40.5m、2号環濠総延長54.0m。
濠形態 1号環濠（内側）は上面幅2.3m、深さ1.5m、断面「V」字形。2号環濠（外側）は上面幅1.2m、深さ0.9m、断面「V」字形。
集 落 舌状台地の最も高いカ所に環濠を設け、台地先端に向かって集落が営まれた。当該期の住居跡2軒、方形周溝墓3基が検出され、上之郷遺跡に連なっていく。
施 設 1号環濠の壁面に幾つかのピットが穿たれている。
文 献 石坂俊郎他「花ノ木・柿ノ木坂・水久保・丸山台」埼玉県埋蔵文化財調査報告書第134集 1994
和光市史編纂室「和光市史 資料編一 自然 原始 古代 中世 近世」 1981
- 25 吹上遺跡（ふきあげ） 所在地 和光市白子3丁目4419-1他

立 地
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期） 平面形・規模・濠形態 詳細不明
集 落 住居跡32軒、方形周溝墓1基 施 設 特になし。
文 献 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成8年度」 1998

26 南通遺跡（みなみどおり） 所在地 富士見市針ヶ谷429-1番地他
立 地 柳瀬川により形成された沖積地を東に臨む台地上にあり、標高16m、比高差12mを測る。
時 期 弥生時代後期終末～古墳時代初頭。古墳時代まで及ぶということで、県内における最も新しい段階での構築といえるが、存続時期について再度検討したい。
平面形 南北に長軸をとる長楕円形で、一周せず開口する部分がある。
規 模 東西160m、南北160m（推定）で、午王山に次ぐ規模。
濠形態 上面幅1.00～1.50m、深さ0.70～1.00mで、断面「V」字形をなす。
集 落 最終的には、300軒を超える規模の集落で、弥生時代終末～古墳時代初頭まで3形式ほどの継続を想定しても、当該地域に於ける拠点的集落であることは確実である。また、環濠外について多くの住居が確認されており、環濠成立前後の関係を検討する必要がある。
施 設 開口する箇所の用途について検討する必要がある。
文 献 和田晋治「南通遺跡第11地点」富士見市遺跡調査会調査報告第37集 1991

27 北通遺跡（きたどおり） 所在地 富士見市大字針ヶ谷
立 地 濠は舌状台地の基部を切って区画する意図が窺える。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）
平面形 調査範囲が限られるため詳細不明 規 模 詳細不明
濠形態 上面幅1.1～2.0m、底面幅0.2～0.25m、深さ1.0m、断面「V」字形をなす。
集 落 詳細不明。 施 設 特になし。
文 献 富士見市遺跡調査会「針ヶ谷遺跡群」富士見市遺跡調査会調査報告第23集 1984

28 別所遺跡（べっしょ） 所在地 富士見市水子字北別所6327他
立 地 柳瀬川を臨む台地上に位置する。標高20m、谷との比高差10mを測る。
時 期 弥生時代後期終末
平面形 調査ヶ所が限られるため不明。南通遺跡と同規模の集落が想定できる。
規 模 不明
濠形態 上面幅1.30～1.50m、底面幅0.30～0.50m、深さ0.80m、断面「U」字形をなす。
集 落 部分的な調査であるが、相当規模の集落と考えられる。
施 設 特になし。
文 献 富士見市教育委員会「中央遺跡群IV」富士見市文化財報告第21集 1981

29 伊佐島遺跡（いさじま） 所在地 上福岡市大字駒林字伊佐島
立 地 荒川西岸の自然堤防上に立地、沖積地との比高は0.5m程である。
時 期 弥生時代後期後半（弥生町式期）濠内部から中部高地系が出土している。覆土の状況から2時期にわたって使用している。
平面形 楕円形（長軸を南北にとる）
規 模 一辺80m以上で、5,000m²程の面積が想定される。
濠形態 上面幅2.30m、深さ1.0～1.30m、断面「V」字形ないし「矢研」形をなす。（要復元）
集 落 5軒（一次調査を含む）、著しい削平のため多くは消滅。
施 設 特になし。
文 献 今井 宏「伊佐島遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第116集 1992
 笹森健一「伊佐島遺跡第2次の調査」上福岡市遺跡調査会報告書第4集 1997

(2) 木曾良遺跡出土の土器について

今回の整理作業に臨み、図示に堪えうるとおもわれた土器については、鋭意実測・図化し、報告を期した。その結果、第4章に掲載された土器実測図は、110余点である。編集の都合上、環濠出土の台付甕・高杯脚部の図に一部掲載を見合わせたものがあるが、作業成果の全容は、おおむね示された。一方、発掘調査の記録は、25年を経て一部に風化が進み、遺物に関する情報にも、結局事実確認がおぼつかなかった内容がある。そのため、出土状況の一部が不明であるなど、遺物の評価にかかる情報を積み残した憾みはあるが、調査成果のあらましは、史料化が果たされたと思いたい。

まず、その内容を器類ごとに通観し、木曾良遺跡出土土器の様相をあらためて確認していきたい。

壺類のうち、壺は、小片を含めて30余点ある。全容が窺えるのは、器高20cm前後と、10cm余のものだが、破片資料の法量から推定して、30cmを越えるものも低からぬ割合を占めるようだ。口縁部は、折り返し口縁と単純口縁が主だが、粘土帯が折り返し口縁に比べ幅広な複合口縁も、少數確認される。頸部断面は、曲線的に屈曲するものが主である。仕上げ調整はミガキが多いが、その間隙にハケメが確認された例が1/3ある。文様装飾は縄文で、櫛描文は確認されなかった。細片だが、沈線区画縄文帯（6住—6）も1点ある。一方、無文のものもある。東京湾岸周辺では、弥生時代後期いっぱい折り返し口縁粘土帯への縄文施文が一般的である一方、駿河湾・相模湾岸地域では、後期後半には無文化が進む。ここでも無文折り返し口縁が目立ち、注意を引く。

22住—1は、胴部中・下位の境に明瞭な稜線が認められる。底部から胴部下位にかけてを成形後、乾燥硬化を待って上部の積み上げを再開する工程による屈折だが、旧遠江・天竜川東岸地域の菊川式の特徴と共通する。頸・胴部の境にも、やや不明瞭だが同様な工程を示す器壁の肥厚が認められる点、その内面に粘土帯接合痕が残されている点（註1）、1次調整痕としてのハケメは確認されないが、仕上げ調整にミガキではなくナデが用いられている点なども、部分的だが菊川式土器との関連をうかがわせる。また、22住—2は、口縁部が内湾し、頸部は明瞭に屈折するようだ。天竜川以西東海地方の影響をみてよいだろう。

壺類では、ほかに短頸壺（18住—1）、無頸壺（環濠—30）がある。

甕類は、台付甕16以上、平底甕1（環濠—10）、不明16である。底部を欠くため器種を確定できないものが多いが、台付甕脚台部破片が目立つ反面、底部破片の多くは壺で、平底甕のそれが見あたらないことからして、平底甕が多数を占める可能性は低い。環濠—10例も、成形、調整に甕の通例とは異なる点があり、広頸壺に近いともいえる。ともあれ、数字が示す傾向通り、主体は台付甕だろう。法量は、胴部最大径20cm前後が中心で、15cm前後の小型品、25cmを越える大型品、40cm近い特大品（環濠—14）もある。口唇部を面取りし、キザミを施すものが多く、平縁は少數である。調整は、ハケメ仕上げとナデ仕上げのものがある。遺跡内の両者の分布は、住居跡ではナデ甕が目立ち、環濠では両者半ばしている。ハケメ甕の口唇部キザミメ凹面には、ハケメと同じ条線があり、施文はハケ調整と同じ工具によっていることがわかる。ナデ甕では、キザミメ凹面が平滑で丸いものが多く、実測者の観察所見では、棒状工具による押圧が推定されている。また両者の中間的な、ハケメほど明瞭ではないが、細かな条線が残るナデ甕（環濠—3）のキザミメは、「箱形」にくほんでいる。ともあれナデ甕の口唇部キザミメも、形状の特徴は安定しており、ハケ甕の場合と同じく、

胴部外面の仕上げ調整と同じ工具が使用されているとみられる。

弥生時代後期の南関東一帯では、おおまかには相模湾岸地域から武蔵野台地・大宮台地地域にかけてはハケメ台付甕、東京湾北西岸地域ではナデ台付甕、同東岸地域と南西岸（三浦半島）地域ではナデ平底甕が主体となる状況が明らかになっている。嚆矢となった比田井克仁の論考で分布図が示されて以来（比田井1981）、近年では、そのさらに詳細な状況、編年的整理に基づく時間的動態の分析が進められている（松本1993、安藤1996）。木曾良遺跡の場合、甕類は台付甕を主体としつつ、ハケメ甕とナデ甕が相半ばしている。周辺の遺跡をみてもナデ台付甕の存在は目立ち、ハケメ台付甕主体地帯の末端に位置し、東京湾岸のナデ甕主体地帯に接する大宮台地地域の立地が反映されているようだ。その状況の細部を論ずるには、ナデ甕と東京湾岸諸地域のナデ甕との比較、そして同地域内のハケメ甕とナデ甕の比較により、相互の影響を把握する必要があるが、ここでは今後の課題として持ち越さざるを得ない。ところで、壺類、鉢類でも、ミガキの隙間にハケメが残り、仕上げ調整に先行してハケ調整が行われたことが確認できる例がある。仕上げ調整によって完全に擦り消された例の存在を予想すると、その割合は低くないとみられる。ハケ調整は、甕の調整技法として話題になりがちだが、セットを構成する器種全体にわたる視野で問題にする必要があるようだ（註2）。

環濠—50は、長胴で、重畠する縄文が特徴的な、荒川西岸比企丘陵とその周辺に主体的に分布する吉ヶ谷式土器である。大宮台地およびその北部低地一帯、のみならず武蔵野台地南部あるいは下末吉台地地域の弥生時代後期遺跡でしばしば見いだされており、移動は活発だったようだ。

環濠—49は、細長い器形に縄文が施され、口縁部粘土帯の下辺に瘤条の貼付文が施される特徴からみて、旧下総北辺部から旧常陸南部を主体分布地域とする上稻吉式土器である。実物が目下行方不明なため、観察所見は未詳である。

高杯類は20余点あるが、大半は環濠から出土した。杯部あるいは脚部のみの個体が多く、全容を窺えるものはない。杯部の形態から、鉢形高杯と有稜高杯に分けられる。鉢形高杯は、口径20cm前後のものと15cm前後のものの大小2者がある。前者では、ゆるく内湾して口縁部付近が直立もしくはやや内湾気味に立ち上がる（環濠—37など）と、内湾が顕著で口縁部が内傾する（環濠—38）がある。小型品の杯部は比較的単純な鉢形だが、口縁部破片のみの個体を考慮に入れると、縄文さらには円形朱文で飾る例が多いようだ。大小いずれを問わず口唇部は面取りされ、その部分にのみ縄文を施す例（環濠—34）もあるなど、端面の成形を意識する傾向は強い。一方、有稜高杯は5例確認される。口径30cmを越える大型品（12住—1）、20cm前後の中型品（環濠—43・44）、15cm前後の小型品（環濠—28）がある。有稜高杯は、東海地方、旧信濃地方からの影響が問題となるが、その伝播の構造は、比田井克仁が詳細に論じるところである（比田井1985）。環濠—28にみられる口縁部の外反を強調する器形は、旧信濃地方の箱清水式に関連するものだろう。稜部径が相対的に小さい10住—6、環濠—43は、従来「東海系高杯」等と呼称されてきたとおり、天竜川以西東海地方の影響に基づく。脚部は、高さが7cm前後で台付甕脚部に似た形状のものと、5cm以下で裾が大きく開くものがある。高さ10cmを越えるとみられる10住—15は、吉ヶ谷式に関連する可能性がある。

南関東一帯は、弥生時代において高杯は主要器類に含まれなかった。東海地方、旧信濃地方など、高杯が主要器種に含まれていた地方では、有稜高杯は法量、比率で鉢形高杯を上回るが、南関東ではそうではない。山中型高杯の分布が際だつ相模湾沿岸地域は別にしておくが、南関東の有稜高杯は、本来的な姿から矮小化し、鉢形高杯をしのぐ存在ではなかった。このことは、南関東における高杯の存在意義をよく示している。その立場が一変し、主たる位置の一角を占めるようになるのは、「東海系高杯」（「元屋敷型高杯」）の定着以降である。

環濠—45は脚部のみだが、相対的に長脚で、ゆるやかに開いた裾端部を折り返す特徴は、旧遠江西部の西遠山中様式土器に類例がある。他に比べ白い色調がきわどっており、他地域からの搬入品である可能性が高い。

環濠—40は鉢形高杯だが、口唇部の湾曲成形、脚部に平行沈線と透穴が配置されるなど、天竜川以西東海地方との関連が明瞭である。脚部は下半が欠損しているが、杯部径に匹敵もしくはそれ以上広がるものと思われる。杯部は内外面とも緻密なミガキで仕上げられ、外面はそれに先行するヨコハケ調整が確認できる。胎土も他の在地品とは異なっており、やはり他地域からの搬入品である可能性が高い。編年的位置づけについては後述する。

鉢類は、口径10～15cmで、浅い塊状のもの（20住—5、環濠—29など）、口径20～25cmで、幅広な胴部に、屈折して外反する短い口縁部をもつもの（環濠—15・16、出土地点不明—2）、それを縮小した形状で、口径10cm前後のもの（環濠—24）、同じく小型で、口縁部がさらに発達したもの（10住—5、環濠—25）がある。

環濠—25は、口縁部の長さが胴部高をしのぎ、内湾志向が顕著である。一方10住—5は、口縁部が相対的に短く、やや内湾している。頸部内面は明瞭な稜を持つが、外面は、口縁部から胴部にかけてタテミガキが連続しており、ややのっぺりとした観がある。系譜は、南関東では辿り難い。環濠—25は、口縁部が明瞭に内湾する特徴から、東海地方との関連を確認すると、浜松市椿野遺跡溝出土土器のうち、「小型壺A」（鈴木他1982）などに類例が見いだされる。東海地方各地に共有される形式のようだが、とりあえず旧遠江西部との関連には注目しておきたい。

様相のまとめに次いで、編年的位置づけについて考えてみたい。

大宮台地地域の後期弥生土器編年は、未だ再構築が懸案となっており、ここでも依るべき具体的な編年案を提示するには到っていない。後期後半以降については資料の蓄積が進みつつあるが、一方後期前半の資料は極端に乏しく、中期宮ノ台式期との間には空白が横たわっている。この点は、相模湾岸地域も同様な状況で、南関東のハケメ台付甕主体地帯に共通する問題となっている。言い換えれば、南関東における後期ハケメ台付甕の出現と定着の過程は、今後解明が待たれる事項である。とりあえず当地域については、浦和・川口市域南部から戸田市域にあたる台地南縁部とその周辺低位部における、良好な資料の発見に期待したい。

木曾良遺跡の土器は、遺構単位で分類すると、環濠内住居跡、環濠、環濠外住居跡それぞれから出土のもの、そして出土地点不明なものにまとめられる。結論からいえば、それぞれの土器群の間に、明瞭な時間差は読みとれない。総体として、弥生時代後期後半を遡るものではないことは認められるだろう。

東海地方産である可能性が高い環濠—40の高杯は、東海地方西部廻間式土器編年（赤塚1990）に照らすと、その高杯B₂に対応し、廻間I式4段階の特徴を示している。編年案に従えば、旧大和纏向2式すなわち庄内式古段階に併行する。環濠出土の土器は、その覆土上層から集中的に出土しており、一挙もしくは連続的に投棄されたとみられる。すなわちおおむね一括性が見込まれる。本例は出土状況が不明であるが、遺存状態が比較的良好く、環濠一括資料に加わる可能性が高いと考えられる。希望的見込みを重ねるきらいはあるが、環濠出土土器群の編年的位置づけに、手がかりが与えられたと考えたい。

他方、環濠—45の高杯は、西遠山中様式土器の特徴を持ち、後期前半に遡る。また10住—6、環濠—43など稜部径が口径に比べ著しく小さい有稜高杯は、断片であるため詳細不明だが、杯部は浅く開きが大きい点から、廻間II・III式併行に下がるだろう。環濠—25、10住—5の鉢は、小型丸底土器の前身にあたる位置を占める点で注意を要する。前者にくらべ、後者は小型丸底土器により近い丁寧な作りとなっており、その存在に関連する可能性がある。また出土地点不明—1のナデ甕も、「く」字状の頸部、球形胴部、口唇部面取りの省略など、他の甕に比べ新しい特徴が顕著である。

このように、出土土器の時間的分布は、廻間I式併行期を主体として、その前後にそれぞれ少しだが、山中式併行期を上限、庄内式新段階～布留I式（廻間II～III式）併行期を下限と考えたい。その様相は、基本的に後期弥生土器の系譜上にあるが、外来系要素の顕現に象徴される古墳時代土器への変化のステップまでは、そう遠くないと思われる。それは、今後、分析の進展と解釈によつては、そのステップの初段あたりに位置づけられる可能性も見込まれる。土師器と弥生土器の境界については言及をひとまず棚上げとするが、今後土器編年案を編成し、弥生時代から古墳時代への推移の実態を探るにあたっては、大宮台地地域でこれまで弥生時代後期とされた資料のうち少なからぬ部分がそれとかかわってくるだろう。

木曾良環濠集落の出現と解体についても、その作業を進展させつつ、あらためて論じたいと考える。

(3) 問題点の整理と今後の課題

1988年、埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会により編集された「弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題」では、全国規模の集成が初めて行われ、様々な問題意識が披露された。しかし、未解決のまま今後の課題として持ち送られた部分も多い。今回、木曾良遺跡の事実報告を中心にまとめ、付編として現時点での集成可能な県内遺跡データーの収録、出土土器の検討を収録した。しかし、課題として残された部分は余りにも大きい。最後に、埼玉県における環濠集落に関する問題点を整理して、次回の報告に繋げることとしたい。

a 環濠の様相

環濠集落の占地 環濠集落の占地は、地形の形状・集落の形態に多くの因果関係を持つようである。地形的には、a 台地の縁辺部、b 丘陵端部、c 独立丘上、d 自然堤防上で検出されるが、a、d については弥生後期に特徴的な占地、b、c については弥生中期まで溯るもののが含まれる。大里

村船木遺跡に代表される b の解釈は微妙である。集落を一周する形態を基本とすれば、丘陵端部を溝により分離することにより同様の解釈が得られる。しかし、多くの場合、墓域と居住域を区別する場合が多いことから環濠としての意味をなさない一面もある。

環濠の数 一重の環濠が巡るものが一般的だが、和光市午王山遺跡、花ノ木遺跡のように二重の環濠を巡らす例がある。午王山遺跡を例に挙げれば、出現が弥生中期後半、消滅が後期後半で一時断絶期を挟んでいるが、集落としての安定性及び規模の点で卓越した内容を備えている。所謂拠点的集落としての位置付けが多く支持を得ているようだ。

環濠の規模 遺存状態（確認面）に左右されることがその宿命であり、調査時に得られた数値と復元された本来の規模には大きな開きが生じる。上福岡市南久我原遺跡で指摘された通り慎重に扱わなければならないだろう。溝の断面形態は、中期後半に「逆台」形「箱矢研」形が、後期に「V」字形が採用される傾向にある。大里村船木遺跡では、ほぼ平行して中期と後期の溝が断面形を異にして掘削されている。時期により溝の形態が明確な差異として捉えることが可能であるのか、示唆的な遺跡である。

b 環濠の機能

環濠を伴う集落を、厳しい緊張状態が存在した証左とする条件には、その立地と環境、そして多くの武器所有など多くの要素を合わせ持った遺跡の存在があつてようやく具体的な事例となる。言い換えればまさしく環濠集落とみなされる一つの定点が、それらの条件を満たす集落とすることはできる。その象徴的な遺跡として群馬県藤岡市の中高瀬観音山遺跡を挙げることができる。

埼玉県内で集成された29遺跡について、上記の条件を基に様々な疑問を挙げてみる。例えば、溝そのものについて、複数の環濠が巡る集落は、より堅固な守りの集落とできるのだろうか。また、環濠間の空間は、果たして如何なる用途で利用されていたのだろうか。和光市花ノ木遺跡、午王山遺跡から得られる情報は、規模が抜きんでていて、おそらく拠点的な意味合いをもつ集落とすることはでき、他とは一線を画する内容である。しかし、それ以上の恣意的な情報はない。強いて設ければ環濠間のテラス状の空間が防御的色彩を持つと考えられる程度のことであろう。

例えば北陸地方においても、①住居跡が少数で武器が少量しか認められず、玉造工房が環濠内にあるもの（福井県下屋敷遺跡）、②多量の石器保有（福井県今市岩畠遺跡、石川県杉谷チャノバタケ遺跡）というおおよそ2つのタイプがある。埼玉県内の環濠集落の様相と対比すると示唆的である。

池上曾根遺跡や朝日遺跡といった戦闘的環濠集落は決して一般的な姿ではない。実態に即した様相の整理と性格付けを今後行っていきたいと考えている。

その際には一般集落との遺構・遺物の対比が重要なのは言うまでもない。本稿では石坂が5—(2)で土器の様相についてまとめたが今後周辺資料を含めて再度検討を試みたいと考えている。

また縄文時代、中近世の資料についても別途報告する予定である。

本稿の分担は以下の通りである。

図版作成—村田・劔持・石坂・福田・佐藤。

執筆分担—2・3…福田、4…村田・書上・福田・佐藤、5(1)…村田、5(2)…石坂、

5(3)…村田・福田。
編 集—福田・佐藤。

謝辞

調査担当者である市川修、昼間孝次の両氏には資料整理の希望をご快諾いただき、さまざまご援助を賜った。まず両氏に深甚なる謝意を表したい。また、岩槻市教育委員会にもさまざまご配慮を頂き、埋蔵文化財調査事業団の諸氏に多大なご協力を頂いた。文末ではあるが、感謝申し上げる次第である。

本稿は平成8・9年度の財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成の成果の一部である。

註

- (註1) 鮫島右大は、これを、便宜的としながら「頸部内面未調整」と呼び、諸例の一部について、菊川式の影響を指摘している（鮫島1996）。
- (註2) 鮫島右大がすでに指摘するところである（鮫島1996；145頁）。

参考・引用文献

- 青木義脩 1968 「浦和市野田発見の縄文土器と弥生式土器について」『埼玉考古第6号』 P26～ 埼玉考古学会
青木義脩・小倉 均・大塚和男 1987 『上野田西台遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第73集 浦和市
遺跡調査会
青木義脩・高山清司・大塚和男 1988 『上野田膝子・上野田西台・上野田向原遺跡』 浦和市遺跡調査会報告書第90
集 浦和市遺跡調査会
青木義脩・大塚和男・柳田博之 1988 『上野田西台遺跡（第4次）発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第108
集 浦和市遺跡調査会
青木義脩・中村誠二・大塚和男・柳田博之 1989 『谷ノ前遺跡発掘調査報告書』 浦和市遺跡調査会報告書第115集 浦
和市遺跡調査会
上尾市教育委員会 1996 『尾山台』 上尾市史編さん調査報告書第10集 上尾市教育委員会
赤塚次郎 1990 「V 考察」『廻間遺跡』 P150～232 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
安藤弘道 1996 「南関東地方における「台付甕形土器」の展開」『鍋と甕 そのデザイン』 P46～62 第4回東海考
古学フォーラム資料
岩槻市 1983 『岩槻市史 考古資料編』
大塚孝司・寺内正明 1986 『ささら遺跡』 蓼田市遺跡調査会調査報告書第1集 蓼田市遺跡調査会
大塚孝司・田中正之・小宮幸晴 1992 『帆立山遺跡』 埼玉県蓼田市文化財調査報告書第18集 埼玉県蓼田市教育委
員会
小熊資二・佐藤茂樹 1972 「加倉遺跡発掘調査報告」『加倉・西原・馬込・平林寺』 P11～36 埼玉県遺跡調査会
金子一成・小林照教 1986 『上野遺跡』 岩槻市教育委員会
小林照教 1980 『上野／・古ヶ場遺跡発掘調査報告書』 岩槻市文化財調査報告書第9号 岩槻市遺跡調査会岩槻市
教育委員会
小林照教・青木文彦 1988 『埋蔵文化財の調査(2)』 岩槻市文化財調査報告書第13号 岩槻市教育委員会
小林照教・青木文彦 1993 『平成4年度岩槻市内遺跡発掘調査報告書』 岩槻市教育委員会

- 小林照教 1995 『加倉中島遺跡発掘調査報告書』 岩槻市遺跡調査会
- 小林照教・青木文彦・関根俊雄 1995 『平成6年度岩槻市内遺跡発掘調査報告書』 岩槻市教育委員会
- 古墳時代土器研究会 1997 『土器が語る—関東古墳時代の黎明—』
- 埼玉県教育委員会 1981 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧III』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 笹森紀巳子 1988 「篠山遺跡」『中里遺跡・篠山遺跡』 大宮市遺跡調査会報告 別冊4 大宮市遺跡調査会
- 笹森紀巳子・澤柳秀実ほか 1994 『深作稻荷台遺跡・A-137号遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第44集 大宮市遺跡調査会
- 笹森紀巳子・小川岳人・田代治 1996 『三崎台遺跡—第3次調査—』 大宮市遺跡調査会報告第56集 大宮市遺跡調査会
- 佐藤茂樹 1972 「西原遺跡発掘調査報告」『加倉・西原・馬込・平林寺』 P37~262 埼玉県遺跡調査会
- 澤柳秀実・笹森紀巳子 1995 『丸ヶ崎遺跡群』 大宮市遺跡調査会報告第50集 大宮市遺跡調査会
- 鮫島右大 1996 『弥生町の壺と環濠集落』『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 第14号 P131~154
- 塩野博 1972 「平林寺遺跡の遺構と出土遺物」『加倉・西原・馬込・平林寺』 P322~344 埼玉県遺跡調査会
- 庄野靖寿・増田逸朗 1972 「馬込遺跡の遺構と出土遺物」『加倉・西原・馬込・平林寺』 P271~317 埼玉県遺跡調査会
- 城近憲市・宮崎朝雄ほか 1971 『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡』 埼玉県遺跡調査報告第8集 埼玉県遺跡調査会
- 鈴木敏則・川江秀孝 1982 『椿野遺跡』
- 田代治・笹森紀巳子・黒坂禎二 1985 『宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告第18集 大宮市教育委員会
- 寺内正明 1994 『さらら遺跡・殿の下遺跡・馬込八番遺跡』 蓼田市文化財調査報告書第22~24集 蓼田市教育委員会
- 寺内正明 1995 『さらら遺跡—第4調査地点—』 蓼田市遺跡調査会調査報告書第23集 蓼田市遺跡調査会
- 寺内正明 1995 『馬込八番遺跡』 蓼田市文化財調査報告書第29集 蓼田市教育委員会
- 野中松夫 1982 『馬込七番第1・第2遺跡』 蓼田市文化財調査報告書第3集 蓼田市教育委員会
- 比田井克仁 1981 「古墳出現前段階の様相について」『考古学基礎論』 3
- 比田井克仁 1985 「弥生時代高杯考」『古代探叢II』 P191~224
- 藤原高志 1983 『さらら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集 賛助埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田逸朗 1971 『諏訪山遺跡』『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡』 P22~114 埼玉県遺跡調査報告第8集 埼玉県遺跡調査会
- 松本完 1993 『南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性』『翔古論集—久保哲三先生追悼論文集』 P47~70
- 宮崎由利江 1988 「中里遺跡」『中里遺跡・篠山遺跡』 大宮市遺跡調査会報告 別冊4 大宮市遺跡調査会
- 安岡路洋 1962 『後遺跡』埼玉県立分化会館
- 安岡路洋 1977 『南中野遺跡（E・F地点）の調査』『第12回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 P8・9 埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会
- 山形洋一・諸墨知義 1984 『鎌倉公園遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第9集 大宮市遺跡調査会
- 山形洋一・諸墨知義 1984 『深作東部遺跡群』 大宮市遺跡調査会報告第10集 大宮市遺跡調査会
- 山口康行・黒須真次 1982 『膝子八幡神社遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第4集 大宮市遺跡調査会
- 山口康行・諸墨知義ほか 1986 『染谷遺跡群発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告第20集 大宮市教育委員会
- 山口康行・渡辺正人 1989 『A-239号遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第27集 大宮市遺跡調査会

山口康行・宮崎由利江 1990 『御藏台遺跡発掘調査報告』 大宮市文化財調査報告第27集 大宮市教育委員会
横川好富・柿沼幹夫 1993 「弥生時代の生活」『中川水系 人文』 P 42～62 埼玉県





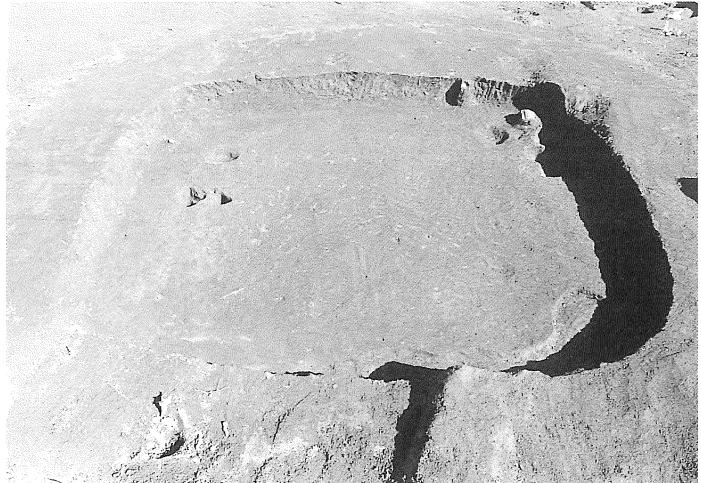
第10号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡勾玉出土状況



第14号住居跡



第18号住居跡



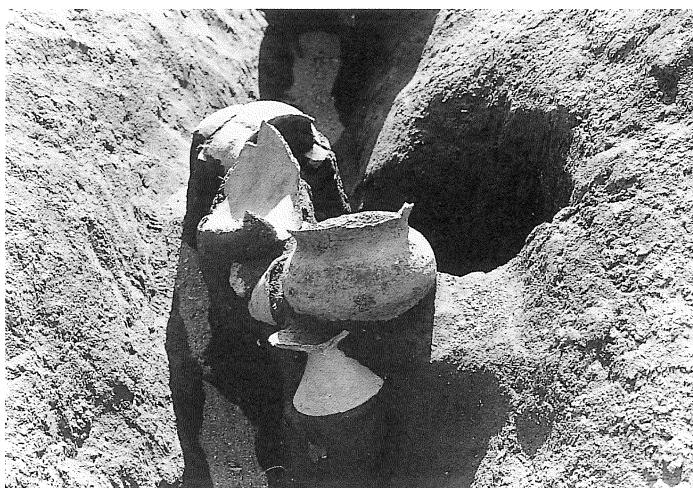
環濠遺物出土狀況(1)



環濠遺物出土狀況(2)



環濠遺物出土狀況(3)



環濠遺物出土狀況(4)



第7号住居跡1



第7号住居跡2



第8号住居跡1



第10号住居跡5



第20号住居跡1



第20号住居跡5



環濠 3



環濠 5



環濠 7



環濠 8



環濠 9



環濠 15



環濠24



環濠25



環濠30



環濠31



環濠34



環濠37



環濠39



環濠40



環濠41



環濠50



一括 2



調査に参加された皆さん

研究紀要 第14号

1998

平成10年3月25日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社